論　文

多様化を通じての統合化の原理

〈RIP friendly SIR STOP etc MOM〉原理の提唱：
人間の生きられる世界の多元的多様化と統合化の原理

吉　田　章　宏

A Principle of Unification through Diversification:
The 〈RIP friendly SIR STOP etc MOM〉 Principle

The diversification of the human lived-world into the multiple realities, and their multi-layered re-integration by means of their mutual exchanging, transformation and complementation

Akihiro YOSHIDA, Ph. D.

淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要第15号抜刷

平成20（2008）年３月

Reprinted from Shukutoku University Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Studies Bulletin No.15 (March 2008)

論　文

多様化を通じての統合化の原理

〈RIP friendly *SIR* STOP etc MOM〉原理の提唱：人間の生きられる世界の多元的多様化と統合化の原理

吉　田　章　宏※

「人間的な英知とは，知っているべき物事の秩序を知ることであり，自分の知識を重要度によって整理することができるということなのです」（レフ・トルストイ）

はじめに

この論稿は，人間の生きられる世界の多様化を通じてのその統合化の原理としての，〈RIP friendly *SIR* STOP etc. MOM〉原理を，そして，この原理に関連して派生する諸原理とを，併せて，提唱するものである。これは，先に発表した論稿（吉田章宏，2007）を受けての考察でもある。本稿は，これらの原理を，展開して証明したり，説明したりするものではない。証明や説明の展開には，膨大な量の論述が必要となるであろう。そうではなくて，読者に，これらの原理を提示し，示唆し，これらの理解へとお誘いし，理解の共有とさらなる深化を呼びかけるものである。

研究の方法，基礎資料，動機と欲望

これらの原理に至る方法は何かと，敢えて問われるならば，私の生涯の多種多様な経験に基づく「想像自由変更」（imaginative free variation）を経た「本質直感」（intuition of the essences）（「本質観取」）がその方法である，と答えたい。

また，これらの原理に到るために用いられた資料はと，敢えて問われるならば，私の生涯の多種多様な経験全体がその母集団として背景にあり，また，そこから意識的かつ目的的に選ばれ蓄積されて来た，私にとって重要な経験の標本集合が，その直接の基礎となる資料となっている，と答えたい。

※　淑徳大学大学院心理学専攻教授

さらにまた，これらの原理への到達を促した，到達を動機づけていた，基礎となった欲望は何であるかと，これも敢えて問われるならば，次のように答えたい。つまり，世界と人間に関する多種多様な学問，知識と知恵の総体の混沌と無秩序に直面して，ただただ混乱して為すすべを知らない状態から，その混沌を分節化し関連付け，総体を秩序立て，目前の混沌に立ち向かって，危うく混乱と錯乱に陥ることから踏みとどまって，生きて行こうとするに当たって，その秩序付けへの動きを支える諸原理を欲したことが，その動機である，と。

研究の「動機と欲望」について再説

再説するならば，この研究を誘発した欲望は，知識と知恵の混沌とした原野を，原理なしで無自覚に放浪することから抜け出て，ある原理をもって自らの彷徨の旅に意味づけすることを求める腹の底から湧き上がってくる欲望であった。混沌に埋没し溺死することを避け，埋没から脱出するためには，生きる世界を狭く限定し，視野を限定することも，一つの選択であったであろう。しかし，私の生は，幸か不幸か，結果として，その選択の道を採らないことになった。そして，その結果として，総体の混沌をそのままに引き受けることにもなった。その総体的な混沌を，単なる総体的な混沌として身に引き受けるのではなく，混沌をその諸部分に分節化し，分節化されたそれぞれの諸部分において，既に多種多様な仕方で生成されてきている大小の部分的秩序を，あるいは，これからの秩序づけを待っている諸部分それぞれに現れ始めている可能的な部分的秩序を，全体として相互に関連付けることによって，総体的な混沌と無秩序にも，何らかの総体的な秩序をもたらすこと，が強く欲望された。それにより，混沌と秩序の調和をもたらす原理を見出し，これからも続くであろう部分的混沌と部分的秩序の総体的な混沌の流れに，何らかの秩序をもたらしたかった。しかも，何らかの固定的で硬直した秩序，いわば剛構造，を混沌に強いて押し付けるのではなく，何らかの総体的で柔軟な秩序をもたらし，総体的な混沌を積極的に活かしつつそれを活性化することによって，その混沌を生きる人間の世界を活性化し，人々の生きる生を，何よりも私自身の生を，混沌による混乱と生の狭隘化と貧困化の世界から，拡大化と豊饒化の世界へと変化させて行くための道標となる諸原理を求めた，そのことが動機と言えば動機である。そのように，研究動機への問いに，私なりに自覚している限りにおいて，答えておきたい。

言い換えれば，私が，私の全生涯の多種多様な経験全体のうちから，次第に意識されるに到った重要な一部分を選び，それらの意識された経験に想像自由変更を行い，本質直感（本質観取）によって，到達したのが，これらの諸原理である，と言えば自己弁護となるであろうか。その原理を求めた根本動機は，部分的秩序と総体的混沌，相互に孤立した島宇宙の並存を思わせる混沌，いわば「バベルの塔」を思わせるような混乱から成る世界の総体的混沌に，その混沌に積極

的な意味と構造を与えうる諸原理を求めた，ということでもある，と言っておきたい。

さて，これらの原理は，そのような性格をもつ原理であってみれば，本論の範囲で述べることのできるような，何らかの「証明」のようなものを，性急に提示することは試みない。また，そのようなことは私には出来ない。さらにまた，そのようなことをする心積りも私にはない。そうではなくて，これらの諸「原理」の意味を，これらの諸原理を体得した読者自らの経験において，再発見し，納得されることこそを，私は期待している。

読者の多種多様な経験において，これらの諸原理が積極的な働きをすることに読者自身が気づいたとき，読者は，そもそも筆者がこれらの諸原理に到達して，それを提唱しようと考えたときの思いを，共有してくださることになるであろう。そもそも未だ，これらの諸原理を理解さえしていない読者には，これらの諸原理の有効性についても，何らの実感も持てないであろう。そのことは，私にとっては，言うまでもない。それゆえ，これらの諸原理を理解出来ない読者によって，これらの諸原理が共有されることを，私は期待していない。これらの諸原理は，読者がそれらを理解なさった時に，理解した読者の経験を多種多様な仕方で活性化することになるであろう。〈RIP friendly *SIR* STOP etc Mom〉原理を中核とする諸原理が，それを理解した人間の経験を活性化する，ということを筆者は主張する。この原理が，仮にある読者の経験を活性化しない場合には，実は，その読者はこれらの諸原理を未だ理解していないからなのだ。したがって，これらの諸原理は，通常の意味では，筆者にとっての他者である読者によっては，論破される可能性は無い。筆者が，読者に期待することは，これらの諸原理を論破するかしないかということではなくて，これらの諸原理を活用し，読者自身の経験を活性化することである。その意味では，「論」や「証拠」を比較して，「論より証拠」というのではなくて，もし敢えて言うならば，「論や証拠より，経験そのもの」，あるいは，「議論によって説得したり納得したりするのでもなく，何らかの証拠によって説得したり納得したりするのでもない。自らの経験で覚知し，自覚し，意識し，納得するものである」と言っておくことにしよう。

諸原理の提示の前に，さしあたり，お断りしておきたいことが四つある。第一に，これらの諸原理は，人間経験における多様な経験世界の間の関係を描いているのであるが，しかし，これが人間経験の総てを描いているわけでもなく，また，人間の経験の可能な分節化の総てを描いているわけでもないことは，言うまでも無く自明のことである，ということである。筆者は，決して，人間経験の総てをこれらの諸原理によって描いているということを主張しているわけではない。そのようなことが可能である，とも考えては居ない。しかも，この特定の時点で，到達した諸原理として，未完であるし，さらに，今後「より少なく未完である（less incomplete）諸原理」が現れることを予期さえもしている，ということを述べておきたい。第二に，その意味では，これらの諸原理の提示も，また，「より少なく未完である原理」への探究の道の途上に現れた暫定的な諸原理の提示である，ということである。しかしまた，第三に，暫定的であるにも拘わらず，こ

の時点において提示されたこれらの諸原理なりに，その本質的構造を明示化している，ということは，主張しておきたい。そして，第四に，これらの諸原理は，簡潔であることをもって，その特長としているということも主張したい。その簡潔性は，まず，未完であることから生じてもいる。が，むしろ，簡潔であることによって，構造と意味が明示的になる，と考えているからでもある，と主張する。つまり，諸原理に簡潔性を追い求めた結果としての，諸原理の簡潔性なのである，ということである。これらの諸原理は，原理への探究の途上で，本質的な構造の結晶として直観され，それゆえに，簡潔になっているのだということを，強く主張しておきたい。

以上のように独断的に主張したうえで，〈RIP friendly *SIR* STOP etc MOM〉原理の提示に入ることにする。

〈RIP *SIR* STOP etc〉原理の提示：その意味と構造

〈RIP *SIR* STOP etc〉原理とは，その名称そのものに，その原理の内容が提示されている。というよりは，原理の内容が，その名称に象徴されるように，名称を定めたのである。名称に，原理の内容が濃縮されて，簡潔に表現されているのである。ただし，注意すべき点がある。それは，〈RIP *SIR* STOP etc〉は，総てAcronymである，ということである。Acronymとは，「頭文字語，頭字語（語群の各語の頭字）を組み合わせて造った語」のことである。ただし，Acronymとしての〈RIP *SIR* STOP etc〉には，英語に無い新造語は含ませていない。すべて，英語における既存語であり，それぞれに意味を有している。そして，それらの意味も，総て，活かされている。〈RIP *SIR* STOP etc〉が如何なるAcronymであるかは，以下で見ていくことになる。Acronym によって表現されたこの原理の意味内容は何か。説明を最小限に留め，原理の名称に沿って，文章命題の形にして述べると，以下のようになる。

「***SIR*** : ***S***ymbol（象徴）界，***I***maginary/Irreal（想像／虚構）界，***R***eal（現実）界，のそれぞれにおいて，**STOP** : **S**pace（空間），**T**ime（時間），**O**thers（他者），**P**erson（パーソン）は，相互に，**etc** : **e**xchangeable（交換可能），**t**ransformable（変換可能），**c**omplementary（補完可能）であり，しかも，*SIR* : Symbol界，Imaginary界，Real界もまた，相互に，etc : exchangeable（交換可能），transformable（変換可能），complementary（補完可能）である。そして，さらに，その原理全体には，Latin 語で**RIP** : Requiescat in pace; May s/he rest in peace ; Rest In Peace「安らかに眠れ」という祈りが捧げられている。RIPは，現実性（**R**eality）の世界，（不可避的）必然性（**I**nevitable necessity）の世界，可能性（**P**ossibility）の世界を表現している」。

以上を，記号象徴によって表現するならば，幾つかの表現形式が考えられる。

「*S*, *I*, *R*のそれぞれにおいて，S，T，O，Pは，相互に，etcであり，しかも，*S*, *I*, *R*もまた，相互に，etcである。この原理〈*SIR* STOP etc〉よ，RIP（安らかに眠れ）」（第一形式）。

さらに短縮して表現するならば，「*SIR*のSTOPは相互にetcであり，しかも，*SIR*もまた，相互にetcである。この原理よRIP，しかも，RIPも相互にetcである」（第二形式）。

さらに圧縮して表現するならば，「*SIR*のSTOPはetc，*SIR*もetcである。RIP。RIPもetcである」（第三形式）。

そしてさらに圧縮するならば「〈RIP *SIR* STOP etc〉は原理である」（第四形式）。

それが，「〈RIP *SIR* STOP etc〉原理」（第五形式）である。

さて，以上の提示に対して，直ちに「その通りだ」と応えてくださる読者の方には，これ以上の説明は不要かもしれない。その方も，その方のこれまでの生涯における経験全体を背景に，ここに示された原理を，つまり著者が本質直感によって捉えたこの原理を，その方ご自身の本質直感により，理解してくださったのかもしれない。そして，もし，そうであるならば，この原理が，その「その通りだ」という言葉そのものによって，確認され，承認され，著者とその読者との間で，共有されたことになる。さらに，その承認は，この原理によって表現されていることを，実現していることになる。例えば，「RにおけるOとPは，相互に，etcである」という原理の実現が，「その通りだ」という言葉によって，表現されていることになる。

しかし，以上の〈RIP *SIR* STOP etc〉原理の提示に対して，不審の念を抱き，疑わしげな眼を差し向けている読者の方には，さらに可能な限りの説明を試みる努力が，著者には，求められているということを感じる。

しかし，その前に，ここで，〈RIP *SIR* STOP etc〉原理は，他の読み方もあることも，提示しておこう。その読み方とは，原理を一つの〈allegory, parable〉（寓話）として読む読み方である。

まず，〈*SIR* STOP〉は，邦訳すれば，「ストップ卿」である。つまり，英国かどこか欧州の想像上の国の貴族であり「卿」の称号をもつ「ストップ卿」という高貴な人物である。もちろん，*SIR* STOPは，想像界の人物であって，現実界の人物ではない。そして，〈RIP *SIR* STOP〉の表現そのものは，象徴界に属する。そこで，〈RIP *SIR* STOP etc〉原理は，*SIR* STOPを代表とする知的に高貴な歴史的な想像上の人物たち，つまり，「ストップ卿等」〈*SIR* STOP etc〉によって象徴される原理である。「ストップ卿等」とは，「ストップ卿」を理解する人々を指す。RIPは，上記のように，「安らかにお眠りください」という祈りの言葉である。そして，〈*SIR* STOP etc〉が，「安らかに眠る」ことを通して，世界にその精神が浸透し，そのことにより，この世界の混沌と秩序が，この世の活性化と豊饒化をもたらすことが，祈念されている。それが，〈RIP *SIR* STOP etc〉原理である。

しかし，それと同時に，“RIP”の語には，「裂き開く，（秘密などを）暴露する」という意味も秘められている。その意味にとると，〈*SIR* STOP etc〉を「暴露せよ，暴き立てよ」という意味になる。つまり，RIPには，一方で「安らかに眠れ」と言いながら，他方で，「暴きたてよ」と

命じている。これは，以下に紹介するストップ卿の口癖「止まるな，止まれ」にも通じる矛盾あるいは葛藤であるが，「安らかに眠る」ストップ卿等を「暴き立てる」ことにより，世にこの世の活性化と豊饒化をもたらすという在り方も，〈RIP *SIR* STOP etc〉原理には，求められている，と理解される。「暴き立てられた」とき，ストップ卿は，「安らかに眠っていた」墓地から立ち上がり，霊界から甦り，幽霊の国・英国の貴族に相応しく，この世を密かに徘徊し，この世を活性化するのかも知れない。しかし，卿は，あくまでも優しく，善意の人（friendly）であり続ける。

ここに，「安らかに眠る」ストップ卿が口癖のように，かつて，出会った人に親しく語りかけていた，警句がある。それは，以下のものである。

"STOP not thinking, but STOP to think" : an epigram by Sir Stop

ストップ卿お気に入りのこの警句を邦訳するならば，以下のようになる。

「思考停止はするなかれ。が，思考するため立ち止まれ」。

あるいは，**「考えることを止めるな。が，立ち止まって考えよ」**。さらに，**「止まるな，しかし，止まれ」**である。つまり，みじかく言えば，**「止まるな，止まれ」**である。さらには，別表現では，**「サア，止まるな，サア，止まれ」**つまり，**「さあ，ストップ」**，**「ストップ卿」**，**"SIR STOP"**であり，**"Sir Stop"**である。

「安らかに眠る」ストップ卿は，安眠の墓から「暴き立てられて」起き上がるとき，恐らく，唱える呪文あるいは警句は，**"STOP not thinking, but STOP to think !"**であろう，と想像される。

さて，この警句が意味するところの多種多様な解釈のうちの一つの解釈は，以下の通りである。

われわれは，誰も彼も，平常は，日常生活の世界に埋没して，忙しく過ごしている。そこでは，すべてが当たり前で，平凡で，なんら代わり映えしない，退屈で，決まりきった，型にはまり慣例となった，日常の，ルーチンの仕事の生活が，日々，絶えることなく営まれている。ルーチンであるがゆえに，個々の営みを無事に運ぶには，あまり考えることを，必要とされない。いや，考えることを必要とされなくなったからこそ，ルーチンなのである。考えることをしないことには，言うまでも無くもちろん，利点がある。ことは順調に何ごともなく進むからである。しかし，同時に，重大な欠点がある。それは，変転と混沌の尽きることのないこの諸行無常の世界において，固定的なルーチンで生きていくことは，密かに近くまで忍び寄って来ているかもしれない破壊と崩壊の時に対して，無為無策で生きていることを意味する。さらには，そのルーチンが創造された時点では，それを創造した人物においては，最大限の思考の努力が発揮されていたに相違ないのだ。しかるに，それが，既製のルーチンとして，例えばマニュアル（手引き，便覧）によって与えられ，利用されるに到ると，そのルーチンの創案者において働いていた思考は停止し，思考停止したことによって，ルーチンとしての働きは，ますます円滑かつ順調になる。しかし，そうなることで，次第に，そのルーチンには，その内容の空洞化がおこる。ルーチンの創始の段階で働いていた思考が停止するために，ルーチンの内実を成していたはずの思考が失わ

れ，ルーチンの形骸化が始まるのである。ちなみに，フッサール，E.（1974／1954）は，その論稿「幾何学の起源」において，学問におけるそのような性質をもつ空洞化の危険を訴え，それからの脱却を「再活性化」と名づけていたことは，周知の通りである。

さて，寓話的には，**“*SIR* STOP”**は，そのような空洞化に起因する固定化と沈滞化を打破して，活性化あるいは再活性化を常に促す人物像として思い描かれる。ただし，マニュアルのように表面的かつ手順的な技術としてではなく，没して「安らかな眠り」に就きつつもなお，人々の精神に生き続けて，広く深く世界に浸透し，人々の思考の活性化を促しつつある，そのような人物として，思い描かれる。それゆえにこそ，「安らかにお眠り下さい：RIP」，「STOP 卿」なのである。ストップ卿は，その思想の深厚さと重厚さにより，もはや，日常的に，世界の出来事の表面に華々しく躍り出てくるようなことはしない。安らかに眠り続けながらも，我々の精神に働きかけて，我々が生きる「混沌と秩序」（カオスとコスモス）の世界に，力動的で柔軟な構造化を促し続けるのである。また，時には，RIP「暴き立てよ」という言葉によって，「安らかに眠る」ストップ卿が，暴き立てられることが事件となり，亡霊となって世に徘徊し，そのために，新たな発見が産まれる。それは，後述のように，**FRIENDLY**なストップ卿に相応しい在り方でもある，と言えるであろう。

以上の解釈は，あくまでも，〈**RIP *SIR* STOP etc**〉原理の，一つの解釈である。

ここで，この**“STOP not thinking, but STOP to think!”**という***SIR* STOP**の警句は，後に展開する〈**RIP *SIR* STOP etc**〉の意味内容にもかかわる警句であることは，後に見ることになるであろう。

以下では，〈**RIP *SIR* STOP etc**〉原理の，それぞれの記号・文字が，何を表現し象徴しているかを，順を追って説明することとしよう。

〈STOP〉の意味と構造

PはPersonの略号である。Personとしての人間を象徴している。ここで，Person は，一人称，二人称，および，三人称を相互に区別しつつも，重層的にそれらのいずれをも包含しており，それらの間の「多声的調和」を表現している，としておくことにする。また，Pは，P自身から捉えたPと，以下に見る，P以外の，Pにとっての他者であるOによって捉えられたPと，この二つが区別される。「PによるP」と「OによるP」である。これらも，Pには，重層的に包含されている。個々のPersonは，「彼（女）自身が，自ら捉えるPerson」であると同時に「他者たちOsが，彼（女）にとっての他者として，彼（女）を捉えるPerson」でもありうる。前者は，彼（女）自身の視点から捉えた「世界内存在」として，後者は，「外部からの視点により捉えた存在者」として，捉えられる。しかし，それと同時に，Personは，一方の視点だけで捉えられた存在に限

定されるものではない。意識的かつ自覚的な存在者として，両者を統合した存在者である。しかも，決して，どちらからも捉え尽すことのできない実存者である。そして，Pは，Pにとっては，森羅万象の総ての発生する源泉でもある。Pにとっては，Pなくして世界は無い。世界は，Pに発する。もちろん，他者たちOsにとっては，Pは，数多くの他者Os中の一人に過ぎない。

つぎに，Oは，Other（s）の略号である。Other（s），Other Person（s），他者（たち）を象徴している。他者Oは，Pに対するO（Other）としての「他者」として現れる。「他者」は，Pに対する「他者」である。注意すべき点は，Pが一人称のPであろうと，二人称のPであろうと，あるいは，三人称のPであろうと，それぞれにとって，Oは，「他者」を表現する象徴であり，それぞれに対応した「他者」が考えられるということである。Oで象徴される「他者」としては，一人称の「私」に対する「他者」を含むが，しかし，この原理においては，それのみを考えているわけではない。実は，人間の自己とは，時に一人称，時に二人称，時に三人称の「私」，「汝」，「誰彼」を，相互に交流させ，重なり合わせながら，その全体を重層的に，一人の自己同一性を帯びた「私」として，そして，一人の個人（Person）として，森羅万象を経験し，その世界を生きているのである，と考える。ここで，本稿の**“*SIR* STOP”**とは，そうした「見えない」Pを目に「見える」象徴図の形に展開したものである，と考える。Pの場合と同様に，「O自身により捉えられたO」（世界内存在）と「O以外の，Oにとっての他者としての別のOにより捉えられた，O」（外部の視点から捉えたO）との二つが区別されるが，これらも，Pの場合と同様，Oには重層的に包含されうる。Os他者には，人間に限らず，Pが他者として経験する存在者の総てが含まれうる。愛犬も持ち主にとって他者，詩人にとっては道端の野花も他者，でありうる。

つぎに，Sは，Spaceの略号である。Space，空間を象徴している。Spaceには，物理学で扱う「客観的空間」と，現象学で扱う「生きられた空間」（ボルノウなど）としての「主観的空間」とを，考えることができる。**〈RIP *SIR* STOP etc〉**原理におけるSは，その両方を表現し象徴している，としておこう。

次に，Tは，Timeの略号である。Time時間を象徴している。Timeにも，Sの場合と同様に，初等物理学で扱う「客観的時間」と，現象学で扱う「生きられる時間」（ミンコフスキーなど）としての「主観的時間」とを，考えることができる。**〈RIP *SIR* STOP etc〉**原理におけるTは，その両方を表現し象徴している，としておこう。

ここで，「主観的」と「客観的」との両方が，STOPのそれぞれに含意されている，あるいは，含意させている，ということは，ウォーコップ（1984）／安永浩（1987）における，説明の「A/B」のパターンに対応し，また，相当する，と考える。説明における「A/B」のパターンとは，また，竹田青嗣が呼ぶところの「実存的な（＝主観的な）世界視線」と「客観的な世界視線」という「世界の二重視線」あるいは「二重の本質的な世界視線」に相当する（2004，33，197），と考えられる。さらにまた，そのより大きな規模の展開は，ボーヴォワールがその名著『老い』（1972）

における，二部構成，すなわち，第二部「世界=内=存在」（下巻）と第一部「外部から視点」（上巻）に対応する，と言ってよいであろう。ここで，「主観的」と「客観的」の，どちらか一方だけに価値が在る，あるいは，一方には価値が無い，と言うことではない。そのことは，ここで，特に強調しておかなくてはならない。ことに，いまだに世を圧倒的に支配しているようにみえる「科学主義的心理学」においては，「主観的だ」と評することが，「価値がない」と言うことを表す婉曲話法となっている暗黙の慣習があるように思われるので，このことを，ことさらに取り上げて，指摘しておかなくてはならない。大切なことは，両者の根本的な相互関係を根源的かつ的確に捉えることであり，性急かつ浅薄に一方だけを偏重したり無視したりすることではない。

〈S，T，O，P〉は，上記の意味で，〈空間，時間，世間，人間〉と捉えることもできるであろう。

さて，「STOP etc」原理に戻るならば，この原理は，以上のS，T，O，Pの四者相互間の関係であり，四者間の二者ごとの，六つの関係において，そして，さらに，それぞれの自己関係的，自己回帰的，あるいは，自己写像的な関係においても，〈etc〉が成立することを表現している。これら6 + 4 =10の組み合わせの相互関係は，〈etc〉関係が成立していることを双方向的矢印で表せば，Figure 1のようになる。

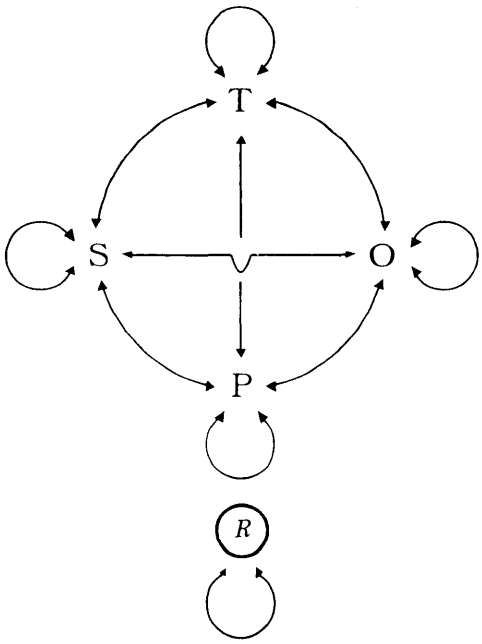

Figure 1 *R* STOP
Copyright 2007 Aiko Oka

〈etc〉の意味

〈etc〉とは，もちろん，〈et cetera〉の略であり，〈and so on (forth)〉を，つまり「……その他，……など」を，意味する。〈STOP etc〉における〈etc〉も，まずそれを意味する。がしかし，それだけではなく，Acronymとして，この脈絡に特有の意味を表現している。再掲すれば，それは，〈etc〉: **e**xchangeable（交換可能），**t**ransformable（変換可能），**c**omplementary（補完可能）の略号であり，「交換可能」，「変換可能」，かつ「補完可能」である，ということを表現し，かつ，象徴している。〈STOP etc〉とは，したがって，「STOPなど」と同時に，「S，T，O，Pが，相互にetcである」という意味を表現し，かつ，象徴している。

〈etc〉は，同一性を必ずしも意味しない。差異性の中の同一性，あるいは，類似性を意味する。

その類似性によって，相互に〈**FRIENDLY**〉（仲良し）になれるのである。「人は自らに似た人を好きになる」の理である。そして，数学的には，必ずしも常に「同型的」（isomorphic）とは限らないが，「準同型的」（homomorphic）であることを意味する。もちろん，数学の場合とは異なり，*SIR*の場合は，ことに現実世界*R*の関係は，必ずしも，「数学的に厳密な準同型性」の関係であるとは限らない。にもかかわらず，〈etc〉として類似性を認めることは，現実世界において，重要な意味をもつ。さて，この関係は，双方向的な矢印（⇔）で表現することが出来るであろう。Figure 1，Figure 2，Figure 3における，双方向的な矢印は，〈etc〉を表現し，象徴している。〈etc〉には，「遷移性・移行性」（transitivity）がある。これは，本質的には，「友達の友達は，友達である」ということに類似的である。そして，このことは極めて重要である。そのことによって，結果的に，〈***SIR* STOP etc**〉に，全体性が出現することになるからである。

さて，次に，*SIR*の説明に移る。

〈*SIR*〉の意味と構造

SIRにおける***S***は，**Symbol**の略号である。*S*は象徴（世）界を表している。STOPにおけるSとは同一文字であるが，区別されなければならない。*SIR*とSTOPとは，次第に明らかになるように，次元を異にする事柄なので，両者のSを混同する恐れは小さいが，その可能性を最小に留めるために，***SIR***は，イタリック体で表記することにする。

*I*はImagination，Imaginary，Imaginativeの略号である。*I*は想像（世）界を表す。

*R*は，Reality，Realの略号である。*R*は，現実（世）界を表す。

さて，先に説明した〈STOP〉は，明示的には述べなかったが，その時点においては，現実世界における，空間，時間，他者，Personを表現していた。ここで，***SIR***の導入により，視野に入れている世界が，現実世界のみの世界から，***SIR***の三つの世界を包含する，より広い重層的な世界に拡大され豊饒化されたことになる。

〈***SIR* etc**〉とは，「**S**，**I**，**R**が，相互に**etc**である」ということを表現し，かつ，象徴している。その関係を図に表せば，Figure 2となる。

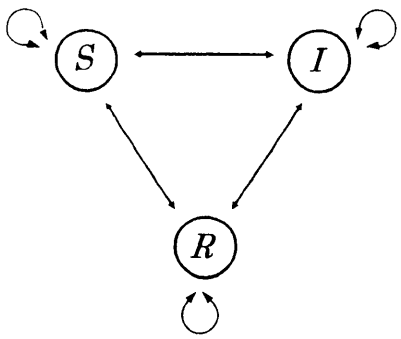

Figure 2　*SIR*

さらに，*SIR*は，それぞれの世界にSTOPを内在させている。もちろん，***SIR***それぞれにおけるSTOPも，それらの相互関係も，言うまでも無く，ある視点から見たときの同一性であって，総て無条件の同一性が保証されているわけではない。そもそも，視点無しの構造は存在しえない。むし

ろ，〈etc〉で関連付けられる同一性は，後に説明するように，FRIENDLYであることを，待ち望んでいる，と言える。つまり，〈親近化，表現，解釈，強調，正規化，発見，解放，知恵の産出〉を，待ち望んでいるのである。しかし，それぞれにおけるSTOPの相互間で，etc が成立している。したがって，その限りで，***SIR***の三つの世界の相互間に，準同型性により，etc が成り立つ。

その全体状況を図に表せば，Figure 3となる。

ここで，余りに錯綜している全体をひと時に提示することにより，話が混乱することを回避するために，RIPに関する話は，後回しにする。まず，〈*SIR* STOP etc〉に限定して，話を進め，その話が一段落してから，改めて，RIPは，取り上げることにする。

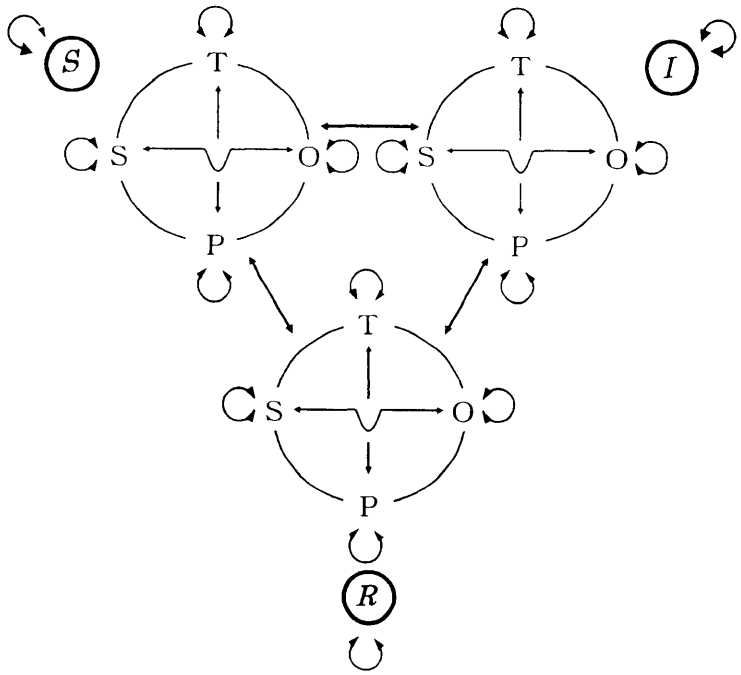

Figure 3 *SIR* STOP

Copyright 2007 Aiko Oka

〈SIR STOP〉はfriendly である。〈friendly SIR STOP〉原理

ここで，上でちょっと触れた点について，多少の寄り道をして，寓話的に，***SIR* STOP**の際立った人柄について一言しておく。***SIR* STOP**の人柄は，〈friendly〉（友好的な，優しい，親切な，役立つ，都合のよい……）である。もちろん，〈friendly〉であることは，*SIR* STOPという人物の性格あるいは人格を特徴付ける特質である。しかし，それと同時に，寓話を離れるなら

ば，〈friendly〉であるということは，ストップ卿に，次の働きがあることを意味している。

FRIENDLY

Familiarizing the unfamiliar：（見慣れぬものを，見慣れたものにする）
Representing the un-represented：（表現されていないものを，表現する）
Interpreting/informing the un-interpreted /uninformed：（まだ解釈されていないものを，解釈する。未だ知らされていないものを，知らせる）
Emphasizing the un-emphasized /de-emphasizing the emphasized：（未だ強調されていないものを，強調する。強調されているものの，強調を取り除く）
[Enabling to see the un-seeable：（見ることの出来ないものを，見ることを可能にする）
Enabling to visualize the invisible：（見えないものを，視覚化することを可能にする）]
Normalizing the un-normalized：（未だ正規化されていないものを，正規化する）
Discovering the un-discovered：（未だ発見されていないものを，発見する）
Liberating the un-liberated：（未だ解放されていないものを，解放する）
Yielding the wisdom：（知恵を産み出す）

つまり，**〈*SIR* STOP〉**が**〈friendly〉**であるとは，単に「友好的である，友情が深い」という意味だけでなく，〈*SIR* STOP〉が，上記のような多様な働きをする，ということを意味している。原理〈*SIR* STOP〉が，上記のような，〈FRIENDLY〉に含意されているような働きをする，という意味が込められている。さらに言い換えれば，〈FRIENDLY〉は，原理〈*SIR* STOP〉の人間の心における機能を表現している，ということである。

この脈絡では，〈FRIENDLY〉もAcronymとして使われている。その意味においても，**〈*SIR* STOP etc〉**は**friendly**である。そこで，**〈friendly *SIR* STOP etc〉**原理とする。

なお，〈FRIENDLY〉は，〈etc〉と併せて，Max Black（1962）の古典的Model/Metaphor論が指摘した，Substitution，Comparison，Interaction（代置・代用，比較，交流・相互作用）の諸機能とも，本質において，重なり合っている，と私は考える。詳論は割愛する。

〈SIR STOP〉の全体性：その分化と統合，一つの寓話

〈*SIR* STOP〉は，friendlyな人柄をもった人物である。そして，かつては，赤子として産まれ，乳幼児として育ち，少年として，さらに，青年として生き，壮年を目覚しく活動に過ごし，老年を……とその生涯を生きてきた。その過程における，*SIR* STOPの構造を考えてみると，赤子であるうちは，まだ，*SIR*の称号も授与されておらず，つまり，*R*からは未だ*I*も*S*も分化していな

かった。また，STOPの自覚さえも無く，無邪気に生きていたのである。そのとき，では，*SIR* STOPのそれぞれの内的区別はあったであろうか。否，それらは，未だ，混沌と未分化の状態にあり，しかも，その未分化の自覚さえも無いまま，しかし，分化されないままの全体性を保っていた。その後，生涯発達の過程に沿って，次第に，内部構造に分化が起こる。さらに，*SIR*の称号も賜るに至って，*SIR* STOP の内部構造には，複雑な分化と組織化が起こり，略図を描くならば，R現実世界においては，Figure 1，*SIR*世界においては，Figure 3のような，いわば専門化し，分化と特殊化を遂げることになる。そのため，乳幼児時代における全体性は失われてしまう。ここで，〈*SIR* STOP etc〉原理は，その全体性の失われた〈*SIR* STOP etc〉の世界に，失われた素朴な全体性そのものに立ち戻るのではなくて，分化と専門化による硬直化と混沌化を経て，なおまた再び，何らかの全体性を取り戻そうと，内部構造の分化と専門化を前提にしつつ，新たにその統合化による統合的全体性を産み出すことを促そうとする原理なのである。それは，〈*SIR* STOP etc〉の人柄が〈FRIENDLY〉であることによって，可能となるものと想像される。

〈*SIR* STOP〉の下位構造とそれぞれの下位原理，その意味と構造

ここで，〈*SIR* STOP etc〉は，Figure 3に示されるように，全体として複雑な構造を成している。したがって，〈*SIR* STOP etc〉は，それを構成する多数の下位原理から成る，と考えることが出来る。その基本は，まず，〈*R* STOP etc〉であろう。すなわち，現実世界における〈STOP etc〉であろう。しかも，その現実世界における〈STOP etc〉も，さらに，六つの二者関係に，相対的に，分解することが可能である。すなわち，〈ST etc〉，〈TO etc〉，〈OP etc〉，〈PS etc〉，〈SO etc〉そして，〈TP etc〉の六つの二者関係である。これらの二者関係に基づく六つの原理の一つ，例えば，〈ST etc〉原理は，「SとTは，etcである」と展開される。その意味は，「空間と時間の間には，互換性があり，相互変換が可能であり，相補性がある」と命題化することができる。残りの他の五つの原理も同様である。さらに，それに加えて，〈SS etc〉，〈TT etc〉，〈OO etc〉，〈PP etc〉の四つの原理がある。したがって，〈*R* STOP etc〉原理は，合計10個の下位原理から成る，ということも出来る。しかし，さらに，もし，三者関係に基づく原理を挙げるならば，例えば〈*R* STO etc〉，〈*R* TOP etc〉，〈*R* OPS etc 〉，および，〈*R* PST etc〉，の4原理も可能である。したがって，もし総ての下位原理を展開するならば，現実世界における〈*SIR* STOP etc〉原理は，合計14個の下位原理から成る，ということができる。14個という数は，STOPの4文字の在不在の組み合わせにより出来る16個から，下位原理として，全ての在の場合と全ての不在の場合を除いた数であり，必然性をもって確定している。さて，それぞれの下位原理の言葉による命題化を総て展開することは，煩雑になるばかりであるので，割愛する。

以上は，〈*R*〉現実世界における，〈STOP etc〉原理，つまり，〈*R* STOP etc〉である。

〈*SIR* STOP etc〉は，そのほかに，〈*I* STOP etc〉（想像世界における原理）および〈*S* STOP〉（象徴世界における原理）も，その構成部分としている。そして，それらの一つ一つは，〈*R* STOP etc〉（現実世界における原理）と同様に，14個の下位原理から成る。しかも，〈*SIR*〉（象徴世界，想像世界，現実世界）は，相互に照応し合って，重層構造を成しているから，その間の下位原理を，部分的に採り上げて明示化するならば，全体としては，極めて複雑な様相を示すことになるであろう。しかし，そのような展開は，〈*SIR* STOP etc〉のもつ簡潔性とそれに伴う全体構造の明瞭性と直観性を損なうことになる。以下では，まず，〈*R* STOP etc〉を構成する二者関係の下位原理の，例示的な解明を示すことにする。

〈*R* STOP〉相互移行と相互関連化，二者間原理：ST，TO，OP，PS，SO，TP，その意味と構造

〈*R* STOP〉原理，つまり，現実世界における，空間，時間，他者，我（Person）の相互交換，変容，補完，の原理を，二者関係に関する六つの下位原理に分けて，それぞれについて，考察を加えることにする。しかし，六つの総てについて詳細に述べることは，不可能に近い。そこで，中軸となる三つについて多少とも述べた上で，その三つから，残りの三つも導出されうることを示し，残りの原理については，さらに簡潔に述べて，その詳細は関連する文献に委ねる，という叙述の仕方を選ぶことにする。

〈*R* ST etc〉原理 まず，〈*R* ST etc〉原理である。これは，現実世界において，空間Sと時間Tとが〈etc〉である，つまり，相互に交換，変容，補完の関係にある，ということを叙述する原理である。この原理は，日常生活においても，意識するしないにかかわらず，生きており，活かされている。

まず，いわゆる「客観的時間」といわゆる「客観的空間」について言えば，「時間」は，アウグスチヌスの『告白』を援用するまでもなく，「客観的時間」でさえも「見えないもの」であり，捉えがたいものである。他方，「客観的空間」は，相互主観性によって「主観的時間」から「構成される」あるいは「主題化される」と考えるにせよ，あるいは，客観的実在の一つの次元として「反映される」と考えるにせよ，いずれにせよ，万人が共有することが可能である，と言えよう。そこで，人間は，時間を表現し計るに当たって，時間を空間に変換し，時間を空間で表現し，時間を空間に交換し，〈etc〉することを，実践してきている。時間を表現するのに，直線矢印を用いるし，アナログ時計を用いてきたし，歴史年表を用いてもきた。時間と空間の間の〈etc〉を示す最も壮大な尺度は，天体間の「空間的距離」を示す「光年」という「時間的」表現であろう。光の速度が最速であり，宇宙空間において一定であると想定されうる限りにおいて，空間は，その一定速度の光が「旅する」に要する「年数」つまり「時間」によって計られてい

も，日常生活においても，例えば，「駅から徒歩十分」の「距離」というが如くに，「空間的距離」を，歩行によって到達するために要する「所要時間」によって計っている事例がある。逆に，「時間」も，「空間」によって表現し計ることも可能である。時間の長さを，矢印の長さで表現することは，日常的な方法である。また，アナログ時計の長針が一回りする「空間的移動」をもって「一時間」が経過した，とすることも日常的である。「見えないもの」としての「時間経過」を「見えるもの」としての，時計の針の「空間的移動」によって表現している事例と，考えられる。一言すると，デジタル時計は，現実世界の時間と象徴世界の数字との間に定められた関係に基づくので，その意味でも，時計を利用する人間にとっては，アナログ時計はデジタル時計とは異なる原理に基づくものである，と考えられる。

ここで，〈etc〉の含意するところも，多少とも，明らかになってきたであろう。

さて，つぎに，「主観的時間」と「主観的空間」について考える。

まず，日常生活的にも，「客観的時間」と「主観的時間」との間には，同一性ではなく，差異性の中の同一性，あるいは，類似性あるいは準同型性があることは，常識的に知られている。例えば，「あっ，もうこんなに時間が経っていたか」とか「長い時間があっという間だった」という時，「客観的時間経過」に，「主観的時間経験」が一致していないことを示している。「楽しい時間は早く経過し，虚しい時間は遅く経過する」という洞察，および，「後の回想においては，楽しい時間は長かったと感じられ，虚しい時間は短かったと感じられる」という洞察は，主観的時間経過と客観的時間経過の不一致を捉えている。しかし，〈friendly〉な〈etc〉は，どちらでも，相互に成り立っている。そうでなければ，そもそも，比較することが意味をもたないであろう。「カタツムリの瞬間」は「人間の瞬間」とは一致しない（ユクスキュール／クリサート，2005，56）。「ゾウの時間」と「ネズミの時間」の間も同様である。その間の比較は，しかし，「人間の時間」を媒介として初めて可能となるのである。「主観的空間」つまり「生きられた空間」については，「空間における住まうことと，時間における希望すること」を説くボルノウの名著『人間と空間』（1978）があることを，忘れてはならない。また，「経験の空間」と「期待の地平」の間の緊張関係の中で現在を生きている人間の生きる歴史的時間の構造を説いたR. Koselleck（1989）の『過ぎ去った未来』という言葉も想起されよう。

つぎに，「客観的空間」と「主観的空間」の間にも，時間の場合と同様に，同一性ではなく，差異性の中の同一性，あるいは，類似性あるいは準同型性がある。空間について言えば，数学において，ユークリッド空間，射影空間，トポロジー空間，……などが構想されているのに対応してか，「主観的空間」は，通常，「客観的空間」に一致するわけではない。

それぞれのPの生きる世界の間の差異により，――― 恐らく，その，エロス，欲望とそれに基づく意味づけと在りようの差異により，――― 子どもと大人とでは，同一の「客観的空間」を異なる仕方で経験している。それぞれの「主観的空間」の間には差異性がある。しかし，その差

異性の中に同一性が成り立っており，したがって，〈etc〉である。比較が意味をもつのは，〈etc〉であることを基礎にしている。さらに，例えば，現代の交通機関の発達により，客観的空間の二点間の距離と，同じ二点間の主観的空間における距離とは，必ずしも一致しない，がしかし，対応はしている。交通機関の便が発達した二点間は，発達していない二点間に較べて，主観的距離は短い。客観的には同一の距離でも，主観的には大きな差異が生じる。この場合，しかし，交通の便が同様である二地点X-Y間と二地点X-Z間とでは，その距離が同じなら，主観的にも，距離は同じとなるであろう。しかしまた，その場合でも，Xは行きたい魅力的な所であり，Yは行きたくない恐ろしい所，あるいは，何とかして避けたい所である，という場合には，X-Yは近く，X-Zは遠く，主観的には経験されるであろう。しかし，その場合でも，空間と時間の間の〈etc〉は成立しており，その間の〈準同型性〉は保たれている。

つぎに，「主観的時間」と「主観的空間」の間にも，つまり，主観的な〈TS〉の間にも，〈etc〉は，成立している。例えば，日常生活世界において，「人の一生は旅である」と言ったりする。それは，仮に，ある人が一生涯あるところに定住してそこから外に出ることがなかったとしても，生涯の時間を思い描くとき，それを空間的な移動としての「旅」として思い描くということを意味している。つまり，経験的時間が経験的空間として，経験されていることを意味している，と言ってよいであろう。時間が空間に置きかえられて具体化され捉えられるということは，「生きられる時間」と「生きられる空間」との間においても行われる，と言ってよいであろう。

つぎに，「主観的時間の図示」について述べる。主観的時間の構造を述べるに当たって，ただ言葉で述べるだけに留めても良いはずであるのに，時間構造を空間的な図の形，図式の形，に写すことは，よく行われる。つまり，「TのSへの変換」である。例えば，キーンの『現象学的心理学』(1989，147）には，「時間の中に自己として存在すること」の「図式的表現」が与えられている。この図は空間的である。そして，「時間の中に自己として存在すること」は，現在の経験の中での，想起と予期，予期の想起，想起の予期，想起の想起，予期の予期などの錯綜する複雑な構造を，過去から現在，現在から未来へと伸びる直線矢印の上に，多数のアーチ矢印で表現することで，空間的に表現しているのである。つまり，主観的時間は，このように客観的空間としての図の上に表現できるし，さらに，この図は，像として記憶され想起されることにより，主観的空間としても，活用され得るのである。また，例えば，フッサールの『内的時間意識の現象学』(1967，39，122）においても，体験流における，未来把持，過去把持，…の相互関係の中に在る時の流れの，言葉による説明を補うために，有名な図式が用いられて，空間的に図解がなされている。これも，主観的時間の流れが，空間的な図式によって示されている事例といえよう。この図も，空間像として記憶され想起されることにより，主観的時間の理解の助けとして活用され得ることを示している，と理解される。メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』(1974，2，315-316）も，「時間的系列」と「空間的多様」を区別する「直前の過去をなお手中に保持してい

る」（同前書，316）という表現を用いて，両者の差異を強調しつつも，フッサールの同図を活用している。なお，最近，フッサールの「時間図表」の多様な変遷に関して詳細な研究が発表されている（中澤栄輔，2007，185－193）。主観的時間と客観的空間・主観的空間との〈etc〉は，これらの事例に照らしても明瞭である。ここには象徴も介在している。

樹木の切り株に見られる年輪の数は，空間的でありながら，その樹齢という時間を示す。同様に，地層の重なりも何万年もの時間を示している。そして，我々は，惑星の光と何万光年もの距離にある恒星の光とを，同時的に，空間的に位置づけて見る。しかし，我々の見ているそれぞれの光の発生は，何万年もの膨大な時で隔てられており，同時に，我々は，その時間的隔たりを，二つの光において，見ているのである。したがって，星空に輝く満天の星に，我々は，宇宙の時間的歴史を同時的に，パノラマとして，見ていることになる。

「時間と空間」の間に差異性が見出されることは，改めて強調するまでもなく，自明と言ってもよい。ジャケレヴィッチ，V.（1994）は，「時間」と「空間」における「行きと帰り」を対比して，「逆行できないもの」としての時間と「逆行できるもの」としての空間との間の根本的差異を鋭く指摘していた。時間と空間は，〈etc〉ではありえても，それには，超えることの不可能な絶対的な壁があることも，多くの論者の論じるとことである。むしろ，そのように多くの論者によって，時間と空間が比較され，その差異性が論じられているところにこそ，時間と空間の間の〈etc〉が表現されている，と私は考えたい。

「時間の空間化」と「空間の時間化」の虚構世界〈***I***〉における実現は後述する。

「主観的時間」と「客観的時間」の間は不連続である。しかし，不連続であればこそ，それらの間にある連続性の発見は，一つの発見となる。主観的時間から客観的時間への移行の問題は，Heidegger（1975）が，そのPart Two : "The Fundamental Ontological Question of the Meaning of Being in General ; The Basic Structures of Basic Ways of Being"（225－330）において，非常に明快かつ具体的に論じて，読者の覚醒と発見を誘っている。不連続と理解されているものの間の連続性を見出す仕事の意味を深く教えられる。

時間については，その他にも無数の洞察が歴史上現れている（服部セイコー，1988）。が，ここでの〈***R* ST**〉原理の理解を共有する目的のためには，以上でとりあえず間にあう，と考えたい。

物事の間の差異性への気づきは，同一性や類似性への気づきに先立つことは，かつて，ビゴツキーが『思考と言語』において指摘していた。総てを差異と観ることは，総てを個別性において観ることである。差異の中に同一と類似を観ることは，関係付けられた両者をそれぞれに構造的に観て，その同一性や類似性を観ることを必要とする。それは，差異性を前提とも背景ともした上での，同一性・類似性の把握なのである。

J. Piagetの愛句「学問的研究は，不連続なものを連続にし，連続なものを不連続にすることに，

（その本質が）ある」（The scientific research consists in making what is discontinuous continuous and in making continuous discontinuous.）（アンリ・ポアンカレ，J. ピアジェによる引用）が，想起される。

つぎに，順序からすれば，〈***R* TO etc**〉原理の話に移るべきなのであるが，その前に，少々大事な寄り道をしたい（これは，ちなみに，〈*S* ST etc〉原理の活用の実践でもある）。その寄り道には，以下で続いて展開する，STOP相互間の10個の関係，および，*SIR*の相互間，RIPについて，共通する問題を，この最初の段階で導入し，今後の見通しをよくすることに狙いがある。その寄り道によって，〈etc〉の関係，ひいては〈friendly〉の働きのもつ重要な意味が指摘される。そのことによって，結果的に〈etc〉が，人間の生きられた世界において，如何に重要な働きを果たすか，という指摘と見通しが与えられることになるであろう。

〈O = MO'M〉原理 この原理は，実は，私が1965年，米国イリノイ大学大学院において，電気工学科，生物物理学科，およびコミュニケーション学科のJoint Seminarとして開講されていたW. Ross Ashby教授の "Cybernetics" の講義を受講していた際に，教授の講義の中のお話から学んだ原理である。既に，一度ならず，日本で，私が紹介している（吉田章宏，1991，216；1995，254；1999，243）原理である。前置きはここまでにして……。

原理は，Ashby教授のもともとの表現では，以下のように表現されていた。

$$S = T^{-1}S'T$$

Figure 4 W. Ross Ashby's Schema

この原理の意味一つの説明は，以下の通りである。

「今仮に，ある世界Wで，Sなる移動を望みながら，何らかの事情で，それが困難である場合，もし別の世界W'に，そのSなる移動の『表現』である移動S'を見いだすことができたとすれば，WからW'への変換Tと，その逆変換T^{-1}を見いだすことで，Sなる移動を，（$T^{-1}S'T$）として実現できる，という知恵である。その後，しかし，私にとってはこの式は，次第に豊かな意味を獲得して行くことになった。その意味の中には，『表現』とか『代表』ということのほかに，例えば，モデル（模型），シンボル（象徴），メタファー（比喩），アナロジー（類比），システム（系），構造と機能，類似性，同型性と準同型性，モンタージュ，抽象と具体，回り道，迂回，障害の回避，代用，……などと関連する意味がある。」（吉田章宏，1999，243－244）

Tは，恐らく，Transformation（変換）の略号であろう。そして，Sは，あるいは，Space（空間，距離）の略号でもあろうか。しかし，Ashby教授が教えてくださった原式のままにSとTの略号を用いると，ここでのわれわれの脈絡では，既に，〈*SIR* STOP〉にSとTが用いられているために，大混乱を生じかねない。そこで，この式を書き換えて，SをOに，TをMに置き換える

ことにする。すると，同じ式が，Figure 5のようになる。

$$\mathbf{O = M^{-1}O'M}$$

Figure 5 A Modification of the W. Ross Ashby's Schema

Mは，Map（地図，写像），あるいはMapping（写像する）の略号とする。数学でも，MappingはTransformation（変換），Function（関数）などと同義語である。そして，**O**は，Oval（卵形，競技場，競走路）の略号とみなすことも可能であり，さらに，Circleの形から，Earth，Worldの象徴ともみなせる。さらに，MOMは母親（「お母さん」）の象徴である。そこで，この式の意味を汲んで，巨視的には，Oは旧い世界Wの故郷の象徴である。Oは，旧い世界Wから出でて，新しい世界W'へとMによって移行し，そこに移住する。その異世界W'では，Oは，O'に写像（Mapping）される。そこでW内のOにおける総ての経験がW'内のO'において，充実して再経験される。その後，逆写像M^{-1}によって，再び，世界WのOに立ち戻った時には，Oは，$M^{-1}OM$に成長していることになる。以下の文中では，上式を**O = MOM**と略記する。Oは，WからMによってW'に写像され，O'を経験し，その後，再び，逆写像M^{-1}によって，W'からWに戻るとき，Oはかつてのoのままではなくて，$M^{-1}O'M$というOになっている。Oと$M^{-1}OM$は，差異性と同一性を兼ね備え，自己同一性も保たれている。また，より微視的には，Oを「競走路」とみなせて，競走路において走った経路Xを求めるために，WからMでW'に写像しX'として，再び逆写像M^{-1}でWに戻せば，WでのXが求まる，という理解も出来るであろう。ここでは，寺田寅彦の随筆『柿の種』の中の「詩歌の世界」という一文も，ふと想起される。

O = MOMの関係は，MO = OMとも表現できる。従来，モデル論においても（Hesse, 1963），類比性を論じるにおいても，例えば詩と数学との類比性を論じる（Buchanan, 1962）においても，初等数学における比例式「A : B = C : D」を構造として，論じることがなされている。確かに，単純な比例式でも，モデルあるいは類比の本質的構造が捉えられている，とも言える。しかし，O = MOMの表現は，現代代数学とつながることによって，さらに一層複雑な，複合的な構造を表現する可能性につながっており，比例式表現よりも優れている，と言える。例えば，現代代数学においては，O = MOMに相当する図式表現が，関数関係の構造図として頻用されており，O = MOMは，一気に代数学の世界に入ることを可能にし，現代代数学の英知の恩恵を享受することを可能にする。

O = MOMにおける「同一性」と「差異性」について触れた。人間の〈世界〉における「同一性」と「差異性」を産み出す「同一化」と「差異化」の意味については，人間の〈世界〉の特有性という観点から論じている次の現象学者による一文が鋭く急所を衝いている。そして，以下の論述の理解を助けるためにも，是非ここで紹介しておかなくてはならない。「……生物学的〈環境〉と対比して，人間に特有の〈世界〉とは，何であろうか。／……一般に動物は，多少の幅

はあるにしても狭い現在を生きることしかできず，したがって現に与えられている環境に閉じこめられることになる。そこには過去も未来もないのである。……ところが，……人間は，記憶や予期の働きによって，過去や未来という次元を開くことができる。もっと正確に言えば，現在のうちに，あるズレ，差異化（デリダの言う〈差延（デイフェランス)〉）が起こり，そこに過去とか未来と呼ばれる次元が開かれてくる。そうした次元へ関わる関わり方が記憶とか予期とか呼ばれるのである。そうすることによって人間は，**現に与えられている環境構造のうちに生きながらも，そこにかつて与えられたことのある環境構造や，与えられうる可能な環境構造を重ね合わせ，それらをたがいに切り換え，相互表出の関係におき，そうすることによって，それらさまざまな環境構造のすべてをおのれの局面としてもちながらも，けっしてそのどれ一つにも還元されることのないような参照項Xを構成して，現に与えられている環境構造をそのXのもちうる可能な一つの局面として受けとることができるようになる。／こうして人間は，動物のように自分の生きている環境構造をそれしかないものとして受けとるのではなく，他にもありうる環境構造の可能な一つとして捉え，いわばそこから少し身を引き離すことができるようになる。その参照項Xが〈世界〉と呼ばれるのである。したがって，〈世界〉とは，さまざまな環境構造を相互に関連させることによって構成される高次の〈構造〉だと言えよう。**」（木田元著，1993年，85-86ページ，強調は引用者）

以上の引用文では，時間による同一化と差異化について述べている。しかし，さらに，人間の生きられた世界の豊饒化は，時間のみでなく，空間により，他者によっても，さらには，想像により，象徴によっても，もたらされうる。この観点からすれば，われわれの〈*SIR* STOP〉原理は，人間の〈世界〉の豊饒化の原理である，とも言えるであろう。また，上記の引用文の中の「**かつて与えられたことのある環境構造や，与えられうる可能な環境構造を重ね合わせ，それらをたがいに切り換え，相互表出の関係におき**」とあり，「**さまざまな環境構造を相互に関連させることによって**」とあるのは，O = MOMに集約されている原理を述べているもの，と理解することもできる。

こうして，「A/B」，「*R* ST」，「O = MOM」と，Heidegger現象学とが，図らずも，引用文で言われている「相互表出の関係」に置かれることになり，次第に，豊饒化された高次の構造をもつ〈世界X〉が現出しつつある。この感覚を共有していただけるであろうか。もちろん，われわれの探究は，さらに歩を進め，「*SIR* STOP etc」原理へ，さらには，「RIP *SIR* STOP etc」へと歩を進めなくてはならない。道は未だ遠い。

さて，ここで再び，寄り道から本道に立ち戻る。そして，先の**〈*R* ST etc〉原理**の探究に続いて，順序から，次の**〈*R* TO etc〉原理**の探究の道に入る。

〈*R* TO etc〉原理　この原理は，現実世界（R）において，時間（T）と他者（O）とが，相互に，

交換可能であり，変換可能であり，相補的である，ということである。

言い換えれば，時間経験と他者経験は〈etc〉であり，相互に〈friendly〉である，という原理である。

日常生活においてさえ，この原理は広く気づかれている。

教育実践者・斎藤喜博（1911－1981）のよく知られた短歌，「未来そのものが今目の前にゐるのだとこの子らをみていう人のあり」は，教育実践に携わる実践者として，現在という瞬間における「他者としての子ども」を，現在からみた「未来そのもの」とみて，教育の仕事の意味を直観し実感するという趣を備えている。同様に，老人をみて，「過去そのもの」と感じる場合もありえよう。

あるいは，また，「他者とは襲いくる未来である」というある哲学者の言葉もまた，他者の他者性に，その自己との差異性に，衝撃を受ける経験が，実は，他者経験であると同時に，時間経験であることを，鋭く表現しているものと思われる。現在の時点では，自らにとって未知を経験させる他者性を備えた他者の世界は，その未知の世界が，未来のいつの日か，自らにとって既知の世界として経験されることになる，という意味でも，その他者は，自らにとって未来なのである。「過ぎ去った未来」という象徴的な言葉は，ここでも鮮やかに生きてくる。

例えば，「子ども叱るな，来た道じゃ，年よりきらうな，行く道じゃ」という言葉はよく知られている。この言葉は，他者と時間を空間に写像して同時に詠っている。「子ども」と「老人」という「他者」が，恐らく，青年あるいは壮年の人間にとって，自らの人生の過去と未来という「時間」を，目に見える仕方で，眼前に示している，ということへの驚きに満ちた気づきと，発見された洞察を表現しているものであろう。しかも，その生涯を，〈*R* ST etc〉原理において見たように，空間的な「道」として，あるいは，暗黙のうちに，空間と時間を統合する「旅」として捉え，象徴的に表現していることが注目される。

また，例えば，高齢者である「恍惚の人」（有吉佐和子）は，そのような状態が自らにも到来することを予期できる人間にとっては，現在の時点において，いわば先取りして，眼前に，自らの未来の世界を生きて示してくれている人間となる。その意味で，「恍惚の人」である「他者」は，時間的には，自らの「未来」なのだ。

「時間と他者」を書名とした哲学者レヴィナスの小論集中の「時間と他者」と題する小文には，次のように書かれている。「未来との関係，現在における未来の現前は，やはり他人との向かい合いのなかで実現するように思われる。向かい合いの状況は，時間の実現そのものである，というわけだ。現在による未来に対する侵蝕は，単独の主体の所業ではなくて，間主観的（相互主観的）関係なのである。時間の条件は，人間同士の関係のうちにないし歴史のうちに存在するのだ」（レヴィナス，1986，73）。例えば，「他者の葬儀」は，「自らの葬儀」の「現在における『未来の現前』」なのである。

同様に，ヴォーボワールは，その著『老い』(1972，下）において，われわれより年長の人たちが死ぬ場合，「彼らが彼らとともにもち去るのはわれわれ自身の過去なのだ」(同書，434）とも，「私の歴史に立ち並んでいる『死者たちの記念碑』，そのなかに葬られているのは私なのだ」(同書，435）ともいう。また，「息子が家業を継ぎ，孫がまた継ぐ，と期待できた社会」では，「彼がそのなかに自己を客体化した所有地あるいは企業は無限に存続すると思われた。彼はそのなかに死後もいきつづけ」(450）る，と書いている。他者によって，彼の死後も生きられる未来という時間が，若い他者によって生きられることが確信をもって予期される限りにおいて，彼の投企は，自らの「死の彼方に位置する目標を目指すこと」(449）が可能となるのである。われわれにとって，他者は時間なのである。

また，Theunissen（1984／1977）には，他者と時間の関係の問題を考察している研究者として，HusserlとBuberが挙げられている。例えば，Husserlにおける「共感」(empathy）に関わっては，「もし私が或る以前の経験を想起するとき，私は私自身をその経験を持った私に戻すことになる。その場合，私は私自身をこの｛超越的な｝他者の立場に共感的に置くことになる」(Theunissen，153）ということで，時間と他者の関係が明示化される。また，Buberの対話哲学においては，「基本語『我とそれ』(I-It）における『それ』(It）は，過去をもつのみで，(presenting and preservingとしての）現在はもたない」(308）とされ，「汝とそれ」(Thou and It）の差異は，「現在と過去」という時間性の差異として解き明かされる。さらに，対話においては，他者である汝が，「私に対して，未来から出て来るが故に，私は，この（現在の）時点で，彼に対して何かをしなくてはならないのだ」(310）と説いている，と紹介している。

以上のように，他者と時間に深い関係が在るということは，多くの哲学者によって豊かに解明されている。問題は，他者，時間，空間と人間（自己）を，どのような相互関連において，統合的，体系的かつ統一的に捉えるかが，問題なのである，と私は理解する。例えば，インガルデンの小論「人間と時間」(1983）は，人間と時間の問題を，リアリズムとイデアリズムの論争の脈絡に置いて，論じている。それらの詳細は，この本稿の射程を遥かに超える大問題である。

次に，**〈*R* OP etc〉原理**の探究に移る。

〈*R* OP etc〉原理　この原理は，現実世界（*R*）において，他者（O）とパーソン（P）とが，相互に，交換可能であり，変換可能であり，相補的である，ということである。ここで，この場合，Personを他者で無いPersonとして，「自己」としてもよい。いや，しかし，Personは，総てがそこから発するところの源泉としての「私」，「自己」として，理解すべきであろう。そして，そのように，「自己」に言及するならば，本原理は，他者経験と自己経験は〈etc〉であり，相互に〈friendly〉である，という原理である。より限定された意味では，他者理解と自己理解は，相互に〈etc〉であり，相互に〈friendly〉である，という原理である。これは，人間について深い理解を内包する総ての心理学の原理である，と私は思う。詳細を述べるならば，膨大となるで

あろうし，逆に，広く自明あるいは当然とされているならば，詳細を述べる必要は無いかもしれない。

私／自己（P）が，〈いま，ここ〉に在るとき，他者Oは，私の〈いま，ここ〉とは時間的空間的に異なる〈その時，其処〉に在ることができる。*R*（現実世界）においては，私は，私の〈いま，ここ〉を離れることができない。〈いま，ここ〉は，常に，私を捉えて離さない。他者は，それぞれの〈いま，ここ〉を生きながら，その〈いま，ここ〉は，私の〈いま，ここ〉とは異なる，その他者にとっての〈いま，ここ〉である。それゆえ，私が，〈いま，ここ〉から離れることの代わりに，私の〈いま，ここ〉を離れている他者の〈その時，其処〉での経験を，何らかの仕方で，「知る」ことをもって，私の〈その時，其処〉で私が経験することの，代わりとすることができる，これが，〈*R* OP〉原理である。

もちろん，私の経験は，他者の経験によって，完全に代置できるはずはない。しかし，また，その代置の可能性こそが，人間のコミュニケーション，教育活動を支える原理でもある。Schutz（1973）の社会学では，この問題が，OP間のPerceptionに関するだけでなく，OP間のActionの〈etc〉に関しても，詳細に展開されている。拙著（1995，110－112）にその一端を紹介しておいた。また，他者理解と自己理解における「説明と理解」については，拙稿（2005a）に展開してある。

リクール（1996）は，『他者のような自己自身』で，他者問題を多面的に豊かに展開している。〈*R* OP〉の詳細な展開を企図するに当たっては，「自己自身のような他者」と「他者のような自己自身」との「弁証法」を主軸にすることが，考えられる。

この**〈*R* OP etc〉原理**もまた，日常生活においては，既に広く認められている。実際，「他者は自己の鏡」であり，したがって，「自己は他者の鏡」である。また，「人こそ人の鏡」とか「他人の振りみて，わが振り直せ」という諺は広く用いられている。「わが振り」は，直ちには，我には見えない。さらに，しかし，「われわれは，ひっきょう自分の背たけに合わせてしか他人を判断できないのである。自分の心が成長するにつれて，他人が偉大なら，その偉大さもつかめるようになる。」（波多野完治，1990，198）とするならば，われわれは，他者との出会いによって，自己超越を促されることになる，と言える。

〈OP〉の間の関係は，R.D. レインの『結ぼれ』や『好き，好き，好き』の世界に鮮明に示されているように，PがOを知るだけで終わる一方的な関係だけではなくて，Oの世界とPの世界の間で，限りなく繰り返し相互に映しあう，二枚鏡を向かい合わせたような双方向的な関係でもある。そのことも，**〈*R* OP etc〉原理**には含意されている。

また，例えば，教育研究の分野では，時間的な代置は，教育史学（各国教育史，世界教育史，日本教育史など）ともなるし，空間的な代置は，（国際）比較教育学（日米比較教育研究など）ともなる。他の分野でも，基本的には，同様である，と言ってよいであろう。

また，時間的次元で，過去の歴史からどのように学ぶかについて，渡邊二郎（1999）による鮮やかな解明により提示された「三つの歴史観」，すなわち，「超越的歴史観」，「内在的歴史観」，そして，「実存的歴史観」の対比が想起される。この対比は，個人としてのPersonが，他者Oの「歴史」に如何に学ぶかについて，三つの可能性の好範例となっている。なお，ニーチェの『生に対する歴史の利害』での「骨董的歴史」，「批判的歴史」，「記念碑的歴史」を論じた実存的歴史観と，個人の実践記録からの「学び」との間の関連付けが，つまり〈*R* OP etc〉原理が，個人である授業実践者・武田常夫の実践記録に即して具体的に成されている業績（小森健太郎，1992）において，既に実現されていることにも，ここで言及しておきたい。

三つの二者間原理の結合による，残余三つの二者間原理の実現

さて，以上の三つの原理が，何らかの仕方で，仮に納得されたと仮定してみよう。すると，〈etc〉の遷移性を認める限りにおいて，〈*R* STOP〉の残りの七つのうち，S，T，O，Pの異なるもの二者間についての原理三つもまた，納得されるはずである。なぜならば，〈ST〉，〈TO〉，〈OP〉について〈etc〉原理が成立することで，〈PS〉が同様に成立することが，納得されるであろう。なぜならば，〈etc〉であることで，数学で言う "commutative law"（交換則）「らしきもの」が成立しており，したがって，S⇔T，T⇔O，O⇔P，であるから，P⇔Tであり，かつ，P⇔Sである。さらに，以上から，O⇔Sであることも，導かれよう。したがって，上記の〈ST〉，〈TO〉，〈OP〉が承認された段階で，〈PS〉，〈PT〉，〈OS〉の三つも，間接的にではあるが，同時に，承認されることになる。もちろん，そのような間接的な関係としての原理に留めなくてはならない本質的な理由はない。ただ，紙幅の関係で，簡潔にしたいと考えるだけである。以上により，残余の三つの原理については，簡潔を旨として，簡単なコメントに留めるよう努めたい。

残余三つの二者間原理の支持を示唆する諸文献と諸事実

〈*R* PS etc〉原理 この原理は，現実世界（*R*）において，パーソン（P）と空間（S）とが，相互に，交換可能であり，変換可能であり，相補的である，ということである。これも，日常生活において，例えば，私が成長するということは，多種多様な立場を経験して，多種多様な視点を採れるようになるということである，という智恵として，周知されている。例えば，心理学の世界で周知の，Jean Piaget & Baebel Inhelder（1963，209－246）による，児童の自己中心性の発達を露わにするとされる，周知の「三つ山問題」（"Three Mountains" problem）は，空間的な位置による視点の差異とそれに伴う風景の差異を，Pが，固定した位置に居たままで，感得できるかどうかを，つまりPの心理的成長変化を，露わにすることから，成り立っている。自己中心的な幼少

時ではこの課題を解くことは困難である。しかし，自己中心性を脱した子どもPは，定位置に固定的に留まりながらも，座してなお，仮に異なる空間的位置に移動した場合に変化して見えてくるはずの「三つ山」風景を，正しく「見る」ことが出来るようになる。これはPの「世界内存在」に起こる変化である。言い換えれば，Pの変化とSの変化を，現実世界において，〈*R* PS etc〉として実現している場合である，とも言えよう。

また，Pが現実に空間的移動を実現するには，時間Tの経過を必要とする。そこで，空間（S）と時間（T）の変化を，時間の経過を最小限にするには，少なくとも今日の技術的社会においては，異なるそれぞれの空間的位置に在る他者（O）で，代置することも出来る。その場合，〈*R* TO etc〉を活かしているし，また〈*R* OP etc〉も，同時に，活かしている。ただし，P自らの空間的移動ではなくて，それぞれの位置に在る他者Oにとっての風景を問題とする場合は，〈*R* OP etc〉としての実現である。たとえてみれば，（S，T）世界一周旅行による，空間（S）の変化と時間（T）の経過により，パーソン（P）の視野の拡大により形成される多面的な「日本観」と（O）世界諸国在住の他者（Os）との交信により形成される多面的な「日本観」との差異性と同一性に類比的である。それは，したがってまた，〈*R* PT etc〉であるとも理解することもできる。こうして，この単純な「三つ山」問題の場合において，STOPの相互互換性が，図らずも如実に，露呈されている。

〈*R* SO etc〉原理　この原理は，現実世界（*R*）において，空間（S）と他者（O）とが，相互に，交換可能であり，変換可能であり，相補的である，ということである。これも，日常生活においても，私が立場を変えて，他者の立場をとれば，つまり私が他者の占めている空間を占めるようになれば，他者の世界が経験される，という知恵として，知られている。「立場」とか「視点」いう言葉は，SとOとの互換性を，暗黙に表現している。高い火の見やぐらに立った他者に，「そこから何が見えるか？」と，下から問いかけて，周囲の状況を知るのは，この原理が日常において用いられている事例である。

〈*R* TP etc〉原理　この原理は，現実世界（*R*）において，時間（T）とパーソン（P）とが，相互に，交換可能であり，変換可能であり，相補的である，ということである。これも，日常生活において，私の生涯における変化は，まさに時間による経験の変化によるということは，周知のことである。「人は時とともに変わる」。仮に，時間を逆行が可能だとするなら，時間を戻せば，私も幼児になる。そして，時間の経過により，青年は老人となる。

〈R STOP〉自己内移行と自己関連化
下位原理：SS，TT，OO，PP，その意味と構造

つぎに，〈*R* STOP〉において，S，T，O，Pそれぞれの自己内写像とも言うべき，二者関

係（あるいは，一者関係）について，極く軽く触れておく。これらには，〈SS〉，〈TT〉，〈OO〉，〈PP〉の四種がある。

〈*R* SS etc〉原理：現実世界*R*において，空間Sから空間Sへの写像は，例えば，S.ハヤカワ（1951）の説いた「現地と地図」の関係に見られる。設計図と建造物の関係もそれである。その〈etc〉は，日常生活での普及からして，改めての力説は，不要であろう。

〈*R* TT etc〉原理：現実世界*R*において，時間Tから時間Tへの写像は，遍在している。例えば，「秒分時間，日月年」などの普遍的単位の確立により，日常生活は，まさに，〈*R* TT etc〉原理の上に，営まれている，とも言えよう。また「古代ローマ史」を現代日本において読む人々が増えているのは，歴史趣味が普及し歴史知識への欲求が高まっている，というようなことだけではないであろう。古代ローマ史に近現代史を映し出し，今日の日本と世界への全体的な理解を深化させることへの欲求が高まり広がっている，ということであろう，と理解される。

上記の二原理と関連して，William Blake（1757－1827）の次の詩が示唆的である。

"To see a World in a Grain of Sand/ And a Heaven in a Wild Flower, / Hold Infinity in the palm of your hand/ And Eternity in an hour."

これは，まさに，**〈*R* SS etc〉**と**〈*R* TT etc〉**を詠ったものと言える。

〈*R* OO etc〉原理：現実世界Rにおいて，他者Oと別の他者Oとの間の〈etc〉は，Pにとっての，交換可能性，変容可能性，相互補完性として，日常的に実践されている。例えば，「三人寄れば文殊の知恵」とは，他者たちの相互補完性を表現している，とも理解される。

〈*R* PP etc〉原理：現実世界Rにおいて，P（Person，私，自己）からPへの写像は，例えば，時間を隔てて，あるいは，空間を隔てて，Personの自己同一性に基づいて，行われている。

人間実存の時間性を思えばよい。人間は，時間の流れに沿って，常に自己克服と自己超越を重ねて生きていく。それは，時間の流れの中で，危うく自己同一性を維持しつつ，限りなく自己写像を積み重ねて行く，と想像し，〈*R* PP etc〉を，写像してもよいであろう。

以上は，すべて，*R*世界，すなわち，現実世界における，STOPの相互関係についてであった。そして，これが総ての基本である。しかし，STOPは，人間により，現実世界だけでなく，想像世界（Imaginary/Irreal World）および象徴世界（Symbolic World）においても，経験される。

〈*SIR*〉について

「現実界（R），想像界（I），象徴界（S）」を，独自の意味において，唱えているのは，Jacques Lacan（1901－1981）である。私は，1980年に，米国Duquesne大学で初めてラカンの著作に接する機会を得た。しかし，それ以来，私のLacan理解は，残念ながら少しも深まらず，未だ甚だ浅

いものに留まっている。そこで，Lacanの独自の意味体系（新宮一成，1995，190－204）を，将来，ここでの構想に重ね合わせることが出来るかどうかは，現在の私には不明である。ラカンの象徴界，想像界，現実界の三者の区分は，相互の差異化が斜になっており不協和を起こすようにも，現在の私には感じられる。例えば，（表現界，想像界，知覚界）なら，幾分，意識経験に即して，より一元的な区別になるかなとか，あるいは，（象徴界，虚構界，現実界）がよいかな，などと考えたりもする。しかしここでは，素朴に，一般的な意味で，曖昧さを残しつつ緩やかに，この三界を定立し，これまでの〈*R*〉（現実界）のみに狭く限定されていた〈STOP〉構造への洞察を，広く〈*SIR*〉（象徴界，想像界，現実界）に拡大することに主力点を置くこととする。

〈*R*〉（現実界）は "The Lived-world of realities" であり，主体Pによって，「現実である」と信じられている世界である。〈*R* STOP etc〉原理で，展開した。

〈*I*〉（想像界）は，"The Lived-world of Irreal /Images" であり，主体Pによって，「想像された非現実の，虚構の，世界である」と信じられている世界である。想像（Imagination）には，自分自身の現実の想像経験の現象学的解明を行っているCasey（1976）によれば，Imagining（事物現象の想像），Imagining-that（事態の想像），Imagining-how（経験の想像）の三種が，区別されるという。しかし，本論の脈絡では，想像が，如何なる多種多様性をもたらすか，また，それが，他界とどれだけ豊かな関係を結べるか，ということに力点をおきたい。そして，そのように考えると，後述するRIPとの関連で，現実性（R）の延長あるいは拡大に留まる想像と，可能性（P）の可能な限りに自由な展開としての想像とは，根本的に区別されなくてはならない。とすると，想像界は，単に「想像」によって産み出される世界であるというだけでなく，むしろ，現実界を想像界の可能性のうちの一つの実現として捉える見方が，一層重要になってくる。わかりやすい卑近な類例として，Jean Piagetの具体的操作段階から形式的操作段階への移行を想起し，挙げることができる。前者では，可能性は，現実性から手探りで，現実例を延長し拡大することで見出されて行く。これに対して，後者では，現実性の解明に基づき，現実性から一旦離れて，考えうる総ての可能性を論理的かつ悉皆的に展開し，現実をその可能性の中の只の一つとみなす境地に到る。上記の重要な見方に必要とされる移行は，この移行に類比的でもある，想像界における，現実に密着した想像と，現実を超えて自由に飛翔する想像との区分が必要となる。すると，現実界から「現実に即した想像界」，さらに，「現実から飛び立って自由に飛翔する虚構界」への移行が必要になってくる，ということになる。それでこそ，人間にとって可能な世界を覆い尽くすことに近づけるであろう。ここでは，想像界を，単なるImaginationの世界に留めず，さらに，Imaninary/Irrealで，Fictitiousな世界として，つまり，"IF" あるいは "AS-IF" の世界として想定しておくことにしよう。このことは，人間存在にとっての「虚構」の意味の重大性に，常に留意することを促すことになる。「虚構」の問題の一端は，拙論（吉田章宏，2005B）において触れたことがある。虚構とは「現実をふまえ，現実をこえる世界」であるとする西郷竹彦の思想（2005，

9）に大いに学ぶべきである，と私は信じている。なぜならば，「虚構によってしか人生のふかい意味をとらえることはできない」（西郷竹彦，1991，154）からである。

〈*S*〉（象徴界）は，"The Lived-world of symbols"であり，主体Pによって，「象徴の世界である」と信じられている世界である。ここで，シンボルは，S.ランガーが『シンボルの哲学』（1960）で採り上げているように，記号，絵画，言語，神話，イコン，音楽，芸術，数学，……などなど，極めて広い意味で，捉えておくことにする。ランガーの「関係を図解する代わりに，それらに命名するという工夫は，言語におどろくべき活動範囲を与える」（同書，88）という言葉は，私にとって，啓示的であった。

シンボルは，「見えないもの」を「見えるもの（聞こえるもの，感覚・知覚・表象できるもの）」に変換する。変換されたことにより，人間は，シンボルを，見たり，感じたり，考えたり，それに対する一定の行為を行（おこな）ったり，それに成ったり，それを生きたりすることが出来るようになる。そのようなことを実現するための媒体の働きをする役割を象徴界は担っている。例えば，「こころ」は，「こころ」という言葉自体を初め，無数のシンボル無しには，それについて，そもそも語ることさえできない「見えないもの」である。例えば，大乗仏典宝積経は，「こころ」を多数の巧みな比喩によって，象徴によって，「見えないもの」を「見えるもの」として，彩り豊かに，その特徴を捉えて語っている。

現実世界*R*で成立していた**〈*R* STOP etc〉**は，ここに到って，**〈*SIR* STOP〉**として，拡張されて立ち現れることになる。

すなわち，〈*SIR*〉の〈*S*〉，〈*I*〉，〈*R*〉のそれぞれには，これまで検討してきた〈*R* STOP etc〉と同様に，〈*S* STOP〉原理，および，〈*I* STOP〉原理，が成立している，というのが，〈*SIR* STOP etc〉原理である。

〈*S* STOP〉原理，および，〈*I* STOP〉原理それぞれを，〈*R* STOP〉と同様に展開することは，余りにも膨大になりまた煩雑になるので，割愛する。〈*R* STOP〉を，〈O=MO'M〉の原理によって，写像することの可能性を指摘することで，この割愛を弁護し弁解しておくこととする。そして，以下の議論では，〈*S*〉，〈*I*〉および〈*R*〉の象徴的記号で，それぞれに，〈*S* STOP etc〉，〈*I* STOP etc〉，および，〈*R* STOP etc〉を，表現することとする。

なお，付言しておきたいことは，〈*S*〉，〈*I*〉，〈*R*〉の三者の間には，次のような，ゆるい類比的対応関係が見られる。すなわち，〈*R*〉：Reality/Geschichte（現実の出来事としての歴史），〈*S.*〉：Reality-Symbol / Historie（現実の出来事を語ったものとしての歴史），〈*I*〉：Imaginary-Symbol/ Roman：（想像により創作された虚構としての歴史小説）という相互対応関係である。ここで注目したいのは，〈*I*〉が歴史理解を豊饒化する働きである。言うまでも無く，〈*I*〉は，〈*R*〉と決して混同されてはならない，いや，〈*R*〉からは峻別されるべきであろう。しかし，そのことは，〈*S*〉と〈*I*〉が，〈*R*〉と並んで，人間の経験の豊饒化において重要な貢献をすることを，いささ

かも否定するものではない。例えば，塩野七生は，「歴史はまさに人間学の宝庫」として，歴史に学ぶさいに「大事なのは『歴史のif』を持つことです」とも，「『ifの活用』で想像力をもって歴史を考えることが，ひいては現代社会を考える上での指針になる」(2007，127) とも，記している。「歴史のif」はいわば〈*R*〉と〈*I*〉の共通部分である。そして，〈*I*〉は，さらに遥かに広大な世界である。〈if〉は，〈imaginary/irreal〉(想像的・虚構的) と〈factual〉(事実的) の組み合わせのようにも映ってくる。つまり，〈if〉は，〈imagined facts〉(想像された事実) あるいは，〈imaginative facts〉(想像的事実) であろうか，などと思ったりもする。いずれにせよ，「歴史のif」は，現実的事実 (real facts) の延長上にある。

〈*SIR* etc〉の世界間移行と相互関連化，下位原理：*SI*，*IR*，*RS*，その意味と構造

次に，〈*R* STOP〉における〈S〉，〈T〉，〈O〉，〈P〉相互間の〈etc〉関係と同様に，〈*SIR*〉における，〈*S*〉，〈*I*〉，〈*R*〉相互間の〈etc〉関係についても，触れておかなくてはならない。

〈*SI* etc〉原理：〈*S* STOP etc〉と〈*I* STOP etc〉とが，相互に〈etc〉である，という原理である。〈*S*〉(象徴世界) は，「見えないもの」を「見えるもの」にする。〈*R*〉(現実世界) においては，当初は，不在なために「見えないもの」となっている存在物を，象徴*S*によって，「見えるもの」にする，と言う仕方で，*S*が現れる。ベルリンに行っていてパリには不在の人物ピエールを，写真によってパリで想起するなどである。しかし，さらに，その人物が仮に亡くなった場合も，やはり，*S*によって「見えるもの」とすることが行われる。さらに，空想や想像によって虚構として創造された人物も，やはり，*S*によって「見えるもの」とすることができるようになる。そして，さらに，〈*S*〉は，現実には存在しない〈*I*〉(虚構の世界) を想像して創造することをも，可能にする。ある小説についての谷崎潤一郎 (1958／1934) の言葉がある。「私の青年時代の作に『麒麟』と云う小篇がありますが，あれは實は，内容よりも『麒麟』と云う標題の文字の方が最初に頭にありました。さうしてその文字から空想が生じ，ああ云う物語が発展したのでありました」(70)。この場合，『麒麟』という*S*が，ある虚構の物語世界を想像させ創造させたのである。こうして，*S*と*I*の関係は，「見えないもの」を「見えるもの」とするという関係の場合から，「見えるもの」が「見えないもの」を想像させ，創造させる，という関係の場合まで，広がっていることがわかる。

〈*S*〉と〈*I*〉の共謀により，「虚構の時間」〈*I* TT〉も構成されうる。例えば，川端柳太郎 (1978) には，次のような紹介がある。「1902年から35年までの33年間にわたる主人公アントニーの日記や覚え書風のものを，まるで，扇風機で吹き飛ばしたうえ，それらを子供にアトランダムに拾わせてまとめたように構成されている。しかも，読者は，日付の順を追って読むことは許されず，やはり第一頁から順に読まなければならない。」(234－235) これは，現実には存在しえな

い，「アトランダム」な「虚構の時間」が，小説と言う〈S〉（虚構世界）において，創造される可能性が，実現されたということであろう。「虚構の時間」が「虚構の空間」において創造され表現される事例としては，よく知られたダリの抽象絵画「記憶の浸透性」を挙げることができよう。

そうなると，一人の芸術家において，一種類の〈*S*〉に限定されている場合と，二種類の〈*S*〉を駆使できる場合との対比が気になってくる。Sorell, Walter（undated）は大著であるが，その中で，「文章を書く画家」，「絵画を描く作家」，「文章のみの作家」，「絵画のみの画家」と，それぞれの場合の天才について，詳細かつ具体的に論じている。天才作家ゲーテは絵筆も持った。ドストエフスキーは文章のみで仕事をした天才作家であった。ここに，巨大な問題が在ることを，教えられた。

Mackeller（1957）もArnheim（1969）も，主として，**〈*SI* etc〉原理**をめぐって展開されている優れた楽しい著作である，と私は理解している。

〈*IR* etc〉：〈*I* STOP etc〉と〈*R* STOP etc〉とが，相互に〈etc〉である，という原理である。前述の「歴史のif」の重要性の指摘は，現実の可能性の拡大としての〈*I*〉（想像界）の意味を例証している。さらにまた，「事実は小説よりも奇なり」とか，常識な意味で「芸術は現実を模倣する」のみでなく，ワイルドの言葉だったと思うが，「現実は芸術を模倣する」とか，〈*I*〉〈*R*〉相互間の密接な関係を示唆あるいは指摘する様々な言葉が多くある。ことに，〈*I*〉を，人間研究において，単なる無駄な「遊び」や「戯れ」としか捉えない偏狭な実証主義あるいは客観主義的科学主義の無知蒙昧に対しては，塩野七生の「歴史はまさに人間学の宝庫」という言葉に加えて，〈*I*〉（虚構世界）からの贈り物である「虚構の芸術はまさに人間学の宝庫」であることを，指摘しなくてはならない。ここで，精神医学者・村上仁の「精神科にはいったら一，二年，精神医学の文献なんかよりも，ドストエフスキーを読め」（荻野恒一，1971，252）という言葉，すなわち，村上に傾倒していた若き日の現象学的精神病理学者・荻野恒一へのアドヴァイスの言葉，を想起すれば足りる。

〈*RS* etc〉原理：〈*R* STOP etc〉と〈*S* STOP etc〉とが，相互に〈etc〉である，という原理である。これは，例えば，物理学者や化学者が，その研究活動において，〈*S*〉（象徴世界）での活動を仮に禁じられた場合を考えてみれば，〈*R*〉と〈*S*〉の人間経験における緊密な関係について多言を要しないであろう。他の領域についても説明は蛇足となる。

〈*SIR* STOP〉の世界内移行と自己関連化，下位原理：SS，II，RR，その意味と構造

〈*SIR*〉において，〈S〉，〈I〉，〈R〉のそれぞれにおいて，内部での移行，あるいは，自己写像が可能であり，それは，〈etc〉である。すなわち，O = MOMの構造を実現し，その効果を生む。

〈*SS* etc〉原理：〈*S* STOP etc〉の内部での移行あるいは自己内写像が可能であり，それにより，新たな意味と構造が出現する，という原理である。〈*SS*〉は，〈*S*〉（象徴界）内部での写像であり，モデル化である。広くは，比喩として通用している。比喩については，膨大な文献を注釈つきで収録しているShibles, Warren A（1971）が，私の手元にある。この分野の研究の広大さには，眼が眩む。近年の業績には，リクール，P.（1984），滝浦静雄（1988）などが，想起される。本稿中で前述の，谷崎潤一郎（1958/1934）『麒麟』の挿話も，*SS*の事例と考えることも出来よう。

O＝MOMの源泉だったアナロジー，モデル，比喩に関しては，付言しておきたいことが四つある。1）Miller Analogy Testのことである。現在はどうなっているか残念ながら私には詳細が不明であるが，知的能力を見る上で，強力な有効性を持つものである，との印象を，私は受けている。2）Synecticsのその後の発展についてである。Synecticsは，類比関係化により，新しい発見を促す方法である。Joyce, Bruce/Weil Marsha（1972）にその魅力的な紹介がある。1980年代以降の発展については寡聞である。知的能力の開発方法として大いに可能性がある，との印象を私は当時受けていた。3）「コトワザ」に関しては，庄司和晃の『コトワザ教育のすすめ』（1987）が，「コトワザは論理である，感性的論理である，道理である」という「諺観」に基づく「コトワザ教育」を説いて，説得力がある。4）今日のCyber社会における「システム構築」の重要な役割を果たしている“Application System Engineer”の仕事の世界において，モデル的思考，アナロジー的思考，あるいは，比喩的思考が，重要な中心的役割を果たしていることを学んだ（Yoshida, Akihiro，2000）。以上，言及しておきたい。

〈*II* etc〉原理：〈*II* STOP etc〉内部での移行あるいは自己内写像が可能であり，それにより，新たな意味と構造が出現する，という原理である。小説が演劇となり，オペラとなり，映画となる。そこに，音楽が伴奏される。それぞれを支えているのは，この原理である。詩も数学も〈I〉（想像世界）の性格を備えていることを承認するならば，――そして，両者がそれを備えていると私は信じているのだが，すると，――詩と数学の関係を説いた，Buchanan, Scott（1962／1929）に，ここで再び言及しておいても良い。

〈*RR* etc〉原理：〈*RR* STOP etc〉内部での移行あるいは自己内写像が可能であり，それにより，新たな意味と構造が出現する，という原理である。これは，既に，〈*R* STOP〉原理において論述しているので，再説は不要であろう。

〈*SIR* STOP〉における遠近法：その意味と構造

さて，〈*SIR* STOP〉について，一通りの論述を終えたので，この段階で，その「遠近法」について触れて，述べておきたい。これは，インガルデン，R.（1983，199－207）で述べられている，文学作品における「遠近法」（perspectivity）ことに，「空間的遠近法」と「時間的遠近法」

に関する考察に示唆を受けて，その主題化の必要が強く感じ取られたことである。それは，ちょうど，文学作品の現実の読者が生きている現実の空間と時間と，文学作品に描かれている作中人物が，刻々，経験しているものとして描かれている虚構世界の空間と時間との，相互関係に関わる。錯綜する多種多様な関係の詳説は割愛するが，要するに，作中人物には，その「生きられる空間」と「生きられる時間」の定位原点とそれに伴う「遠近法」が現れるということである。そして，作者による作品の書かれ方と読者による読まれ方によって，その作品の「遠近法」，例えば，空間的な遠近，あるいは，時間的な遠近，現在，過去，未来の遠近，は多種多様に経験されるし，そこに，多種多様な関係付けのあり方の可能性が生まれる，ということである。この問題は，吉田章宏（2006）において論じた文学作品の「理解」の問題とも関わっている。さて，そこで，〈*SIR* STOP〉においても，〈*SIR* STOP〉を生きている主体の在り方により，文学作品における場合に較べても，なお一層，多種多様な複雑な関係が発生し，出現することは容易に見て取れる。逆に言えば，主体は，〈*SIR* STOP〉の総てを「一様に」経験することは決してありえない。例えば，〈*R* OP〉において，他者を時間として経験することは，少なくとも今日の一般社会の常識を超えている。その経験は，例えば，ボーヴォワールの『老い』に示された卓抜な洞察が修得されたときに初めて，経験されることになる。それほど，困難な経験である。同様に，〈*SIR* STOP〉の示す多種多様な諸経験の，難易性，親近性あるいは疎遠性，必要性などなどが，経験する主体各人によって異なることも，容易に予期される。例えば，〈*S* OP〉において，同一化し理解し易い他者もあれば，それをし難い他者もある。また，例えば，〈*S* PP〉において，幼児期の自己は，同じ過去に属する自己でありながら，壮年期を生きる主体にとってよりも，老年期を生きる主体にとって，遥かに親近性がある，という親近性の差異に関する洞察がある。それにより，主体にとっての「遠近法」にも，何らかの差異が発生するであろう。こうして，〈*SIR* STOP〉の多くの原理において「遠近法」の差異が発生することは自明であろう。しかし，文学作品という限定された世界における「遠近法」の複雑さに照らしても，例えば〈*SI* ST〉の複雑さに照らしても，〈*SIR* STOP〉の遠近法の具体相の詳細な展開は，ここでは到底不可能である。ただ，〈*SIR* STOP〉の具体的な展開に当たっては，〈STOP〉原理のそれぞれにおいて，「遠近法」の問題が出現することを指摘して，その展開は今後に期することとしたい。むしろ，〈*SIR* STOP〉原理の働きは，そのように発生する「遠近法」にもかかわらず，多種多様な制約を超えて，自由自在で柔軟な経験を可能にすることに，その本質がある，と考える。

〈*SIR* STOP etc〉原理の機能

さて，ここで，〈*SIR* STOP etc〉原理の機能について考える。それは，〈*SIR* STOP etc〉原理は，主体が，自己が世界に立ち向かう経験をする際に，その経験の中でどのような働きをすることが

期待されうるか，という問題である。この問題は，考察の初めにおいて，既に暗黙のうちに論じていたが，ここで，改めて，主題化し明示化することにする。

1）通常は意識化されていない諸関係が，〈*SIR* STOP etc〉の部分的諸原理および全体原理に明示化されていることにより，この諸原理が意識化されることになり，諸関係を発動させ，活用することが可能となる。

2）その諸関係は，部分的な諸原理を包含する，諸原理の諸関係の全体としての〈*SIR* STOP〉原理として働くとき，その時々，その場その場での，「我と世界」の経験を，多種多様で大きな全体の一部として，経験の総体を背景あるいは地平にして，物事を柔軟かつ自由自在に理解し，その理解に基づいて，柔軟に自由自在に，状況に対応して，行動することが可能になる。

3）経験の本質構造を簡潔に表現しているので，この原理が理解され修得されるならば，「我と世界」経験の理解とそれに基づく行動において，原理に定式化されている本質的で大事な点を，うっかり忘れて見落としてしまう，ということを避けることが可能となる。どこかで読んだ，ふと思い出す挿話がある。それは，ある時，HusserlがHeideggerの見送りを受けていたどこかの駅頭での会話で，フッサールがハイデッガーに指摘されて，「歴史を考えることを忘れていた」と気がつき，そのように慌てて述べた，とハイデガーが記録している挿話である。人は，それぞれの得意とする側面を忘れることは起こりにくいが，不得意とする側面は，不注意のうちに，視野の外に置かれてしまうということが，起こりうる。ちなみに，フッサールは数学の出身であった。その意味で，原理は，原理に定式化されている本質的な諸次元を，常に使用可能な状態（Ready at hand）に保つことを可能にする。

4）〈*SIR* STOP etc〉が全面的に発動されるならば，「我と世界」に関して多面的かつ重層的な理解が得られることになり，その多面的な理解の間で，多声化と交響化，調和化と響き合いとが引き起こされる可能性が高まる。それは，一方では，固定的な硬直的な秩序に混沌をもたらすことになるかも知れないが，しかし，その結果，柔軟で自由な柔構造の，より豊かな新しい秩序の状態をもたらすことを可能にする。もちろん，この混沌も秩序も相互に相対的である。それは，〈etc〉に基づく，O＝MOMによる，全体構造の活性化による，一時的な混沌と，より高次で豊富化された秩序であると，理解される。

5）〈*SIR* STOP etc〉原理は，「我と世界」経験に多種多様な表現をもたらすことにより，忘却を防止する可能性がある。多様な表現が相互に補い合うからである。例えば，イエイツ・フランセス・A.（1993）『記憶術』にあるように，時間と空間の間を活発に移行しながら，空間的図式として，記憶に留めることにより，忘却の防止を可能にすることが考えられる。これは，「脳の活性化」，「精神の活性化」を促す可能性も高いであろう。

6）〈*SIR* STOP〉原理が活発に活用されるならば，「我と世界」理解の図式は多様化し豊富化するゆえに，「自己理解」と「他者理解」が柔軟になり多面化し，多層化することにより，深ま

る。これは，Gadamerの指摘する「教養」を豊かにすることを可能にする。

7）〈*SIR* STOP〉原理が活発に活用されるならば，断片的に散在していた多種多様な，勘や気づきや知識や知恵が，相互に関連付けられることになり，既往の経験の総てが関連付けられて，統合的に活かされる可能性が高まる。

8）そうした無数の関連付けの総てではないであろうが，しかし，その多くにおいて，関連付けの中から「美しいもの」が発見されることになり，新たな〈楽しみ〉と〈快楽〉が産み出される可能性が出てくる。文学芸術における「異化作用」（大江健三郎，1978）も，そうした働きの一つであると考えられる。

9）〈*SIR* STOP〉原理が活発に活用されるならば，それは，結果として，現象学でいうところの「想像自由変更」（Free Imaginative Variation）を発動させることになる。

10）その結果として，これまた，現象学でいうところの「本質観取」（竹田青嗣，2004）あるいは「本質直観」（Intuition of Essence）を実現する可能性が高まる。本論稿の冒頭でも述べたように，〈*SIR* STOP〉原理そのものが，そのような「想像自由変更」を通しての「本質観取」により獲得された，人間の「我と世界」の経験に関する，本質的な必然的構造である，と筆者は主張する。

11）〈*SIR* STOP〉原理が活発に活用されるならば，「我と世界」に関する経験を，無数の多種多様な表現形式で表現することが生じる。たとえば，一つの理解と洞察を，文章，図，比喩，短歌・俳句・詩，コトワザ……で表現する。あるいは，数式で表現する。そして絵画で，音楽で，舞踊で，映画で，オペラで，……などなど，多様な表現形式が動員される結果となる。そして，その結果，多種多様な表現形式の間の，準同型性あるいは同型性が，発見されることになる。

12）〈*SIR* STOP〉原理が，複数の人間によって活発に活用されるならば，それら複数の人間の間で営まれる「言語ゲーム」は，多元化され多種多様化されて，豊饒化される。

以上の結果は，考えてみれば当然の帰結とも言える。なぜならば，空間（S）と時間（T）と他者（Others）と我・自己・人間（Person）の間の関連づけとその間の準同型性（同型性）の絶えざる発見と発明は，相互交流と相互交渉を促すことにより，〈etc〉を実現し，一層〈friendly〉なサークルを〈STOP〉の間に生成することになる可能性を高めるからである。また，世界の下位世界〔A. Schutz's "the finite provinces of meaning"（Schutz，1973）〕は，人間経験の意味的な「下位世界」であるがゆえに，相互に照応する可能性をもっている。そのため，下位世界の間での相互関連付けに成功すれば，相互に他の表現形式となる可能性が生まれる。そして，相互表現となることにより，〈FRIENDLY etc〉の働きを実現することが可能となるからである。

〈*SIR* STOP etc〉原理の効用は，以上の洞察の誕生過程でも見られた。筆者である私は，実は，〈*SIR* STOP etc〉原理を活用しつつ，上記の洞察を深めて来ているからである。「原理の効用」は，

抽象的に論じてみても，理解に苦しむ読者には，説得力に乏しいかも知れない。自ら生きてみなければ，納得は行かないのである。泳ぎは，水に飛び込まなければ，分かるとも，泳げるとも，言えないのである。とりあえず，ここで止めておく。

ところで，時間，空間，他者（世間），人間（現存在）それらの相互関係は，6通りあることによって，自己写像／反映まで含めれば，10通りあることになる。さらに，*SIR*と三重化することにより，30通りあることになる。さらに，*SIR*三層の合計30通りのうち，三層をなす各10の関係の間の相互関係としては，10×10×10通り，つまり，合計1,000通りの関係が，少なくとも可能性としては，発生し，存在することになる……。こうして，人間経験の重層構造の複雑さは驚嘆に値することが見えてくる。また，そのことに気づかない，そのことが視野に入らない人間理解は，それだけでも皮相なものに留まらざるをえない，ということも，当事者の自覚や気づきの有無に関わらず，鮮明に浮き彫りとなってくる。気づかず自覚がなく，活用出来ない主体は，それだけ，無自覚に狭く彩り乏しい世界に閉じ込められて生きていることになるのであろう。

以上で，**〈*SIR* STOP etc〉原理**に含意されている豊かな内容が説き明かされた。この豊かさで十分だ，と思う間もなく，次に，〈RIP〉の呈示と説明に移ることにする。

〈RIP *SIR* STOP etc〉原理

上述の**〈*SIR* STOP etc〉原理**に，さらに，**〈RIP〉**を加えて，原理を**〈RIP *SIR* STOP etc〉原理**として，現段階での，原理の表現形式とする。**〈RIP〉**とは，**"Reality, Inevitable Necessity, Possibility"**のAcronymであり，**〈現実性，必然性，可能性〉**を表す。必然性を，単純に"Necessity"とせずに，"Inevitable Necessity"としているのは理由がある。「必然性」の和英辞典による英訳語は"Inevitability"と"Necessity"である。〈N〉ではなくて〈I〉を前面に出した理由は，最初はAcronymとするための必要であった。が，結果として，「不可避的な必然性」と強調することができ，しかも，冒頭に述べたように"RIP"に「安らかに眠れ」と「暴きたてよ」の両義性を持たせることができた。で，**〈RIP friendly *SIR* STOP etc〉**を，この段階での原理の表現としておく。

〈RIP〉（Reality, Inevitable Necessity, Possibility）について

「現実性の世界，必然性の世界，可能性の世界」という三界**〈RIP〉**は，現象学的心理学者E.キーン（1989，119－121）により提唱されている。

まず，精神病理学者L.ビンスワンガーが，患者エレン・ウェストという現存在が生きる世界の下位世界として三つの世界を記述していた。その三つの下位世界とは，現存在の運動が，「あゆみ」である「地上の世界」，「飛翔」である「空中の世界」，「爬行」（爪をかけて這い行く）である「地中地下の世界」，の三つである。「第一の世界が実践の意味での帰趨の全体」を，「第二の世界は『翼をもった願望』と『最高の理想』の世界」を，「第三の世界は『地中へひきずりこ

むような』,『気を滅入らすような』,煩わしい,重苦しい,『欲望』の世界」(ビンスワンガー,1959,141－142)をあらわしている,としていた。

そこで,E.キーン(1989,119－121)は,ビンスワンガーの三つの世界を一般化し敷衍して,次のように述べる(ここでの記述の順序はビンスワンガーの三つの順序に合わせる)。

第一の「地表に立つことの,あるいは地表を闊歩することの世界は,実践的な行為の世界である。……,地表の世界では,私たちは可能なるものを取り上げ,それを必然的なるもので調節していく。また,必然なるものを取り上げ,それを可能なるもので生気づける。」第二の「天空の世界には,もろもろの*可能性*が充満している。限界は存在しない。時間は走り行き,未来に向って速やかにずっと進む。……理想主義が現実である。……楽天主義のムード,ユートピア的な幻想の認識……,創造性と生そのものの自発性を伴って天翔る世界を生み出す。」第三の「地中の世界の構造は,もろもろの*必然性*の世界である。時間は着々と,止むことなく過ぎ行き,……。人間の自己は重苦しく,……,そのムードは悲観主義の一種である。墓地の暗さ,墓穴のしめっぽさ,……息の詰まる閉塞 ――― 場所もなく,空間もなく,自由もなく,運動もない ――― がこの世界を特徴づける。私達は捕らわれており,必然性という拘束からの脱出は不可能である。……。」

以上を活かし「現実性の世界(**R**),可能性の世界(**P**),必然性の世界(**I**)」を採る。

RIPという分節化に関しては,さらに詳細に探究すれば,他の種類の分節化の可能性もあるであろう。例えば,ローゼンタール編『カテゴリー論 下』(1958)は,唯物弁証法の立場から「可能性と現実性」を論じている第七章において,「可能性」との関連で,ヘーゲルにならって,「抽象的可能性」と「実在的可能性」の区別とその相互移行,さらには,それらと「実在性」,「偶然性」,との関連を論じている。さらに,「実在性」(reality),「事実性」(facticity, factuality)と「現実性」(actuality, reality),あるいは,「潜在的可能性(デュナミス)」(potentiality)などの相互間の区別と関連づけも,重要ではあろう。しかし,分節化を精緻化すると,それに比例して,全体構造が見えにくくなる可能性も高くなる。さらに,それらに十分な配慮をして論じるには,存在論および認識論の立場を明確にした統一的なカテゴリー論を必須とする。その可能性の展開と,必然性による選択,それ自体余りにも巨大な課題である。本稿には,残念ながら,その用意は未だ無い。そこで,この〈**RIP**〉でよしとして,現実性の世界,つまり,実践の世界を生きることにする。

〈RIP *SIR* STOP etc〉原理の意味と構造について

〈**RIP**〉は,〈**R**〉,〈**I**〉,〈**P**〉相互の間の区別には,「客観的」なものと,「主観的」なものとがある。たいへん大雑把に言えば,Realism(リアリズム)では,〈R〉,〈I〉,〈P〉は,客観的であ

り，その認識には，相互に取り違える素朴な誤りや思い込みから，相対的真理を経て，次第に，客観的真理としての〈R〉，〈I〉，〈P〉に近づくことになる弁証法的認識まである，と構想する。Idealism（イデアリズム）では，〈R〉，〈I〉，〈P〉は，根源的には主観的であり，その認識は，ウアドクサ（原信念）に始まり，経験と他者との交流を通して，次第に，相互主観的な信念に発展する。そして，ついには，相互主観的な，その意味で「客観的な」，超越論的主観性による認識としての〈R〉，〈I〉，〈P〉に到達する，と構想する。両者の論理的筋道の区別としては，はなはだ大雑把であるが，以上のように捉えると，どちらにせよ，特定の個人における「主観的」な〈R〉，〈I〉，〈P〉と，「客観的」で「普遍的」な〈R〉，〈I〉，〈P〉とは，必ずしも一致しないという点については，信念は共有されている。ちなみに，現代統計学においても，客観的確率を出発点に置く伝統的統計学と，主観的確率（subjective probability）を出発点に置くベイズ統計学（Bayesian Statistics）とが並立している状況があった。この状況は，上記の対比に対応している。

さて，ある個人が，それぞれの状況において，例えば，客観的には単なる一つの現実性〈R〉に過ぎない出来事を，そのまま主観的に必然性〈I〉と受け取る場合がある。それは，現実を「運命」と受け取る場合に当たるであろう。また，客観的に必然性〈I〉である出来事を，主観的に単なる可能性〈P〉と受け取る場合もある。それは，「空を飛べる」と確信して崖から飛び降りて死ぬ場合などがそれで，落下という必然性のついての「無知」による悲劇である。また，客観的には一つの可能性〈P〉であるに過ぎない出来事を，主観的に現実性〈R〉と信じてそれに賭ける場合がある。当たると信じて籤を買うのはそれであろう。このようにして，〈R〉，〈I〉，〈P〉は，主観的と客観的とがあり，その対応関係が問題となる。ここでは，この面倒な問題には深入りせず，〈R〉，〈I〉，〈P〉の間の相互関係を採り上げ，私の親しんでいるイデアリズムの一つである現象学の立場から，短いコメントを加えておきたい。

〈R〉，〈I〉，〈P〉は，現象としては，経験世界において，相互に循環する。すなわち，Figure 6 RIPに示したように，現実性〈R〉から可能性〈P〉への移行は，想像によって行われる。現象学の方法としては，「想像自由変更」がこれに当たる。可能性〈P〉から必然性〈I〉への移行は，直観によって起こる，あるいは，行われる。これは，現象学の方法としては，「本質直観」（Spiegelberg, 1971, 676－684），（ジオルジ，A. 2004a, 2004b）あるいは，「本質観取」（竹田青嗣，2004）がこれに当たる。この方法によって直観された，あるいは観取された「本質」は，その現象の本質

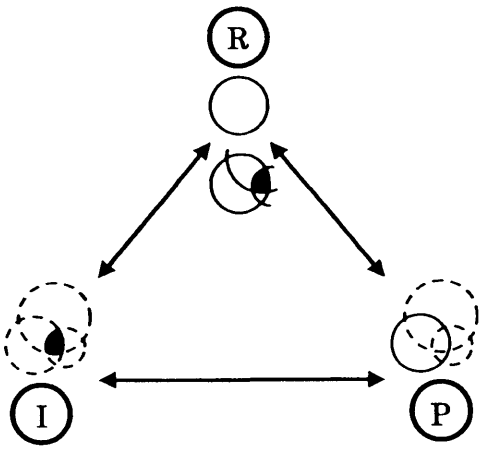

Figure 6 RIP

として，〈P〉において展開された限りの可能性に共通するがゆえに，必然性〈I〉として，現実性〈R〉を理解するための「知識」として働くようになり，その後，現実性〈R〉に働きかけるに当たって，その現象の「本質」として，その価値付け，認識，働きかけとしての行動，などなどに生かされることになる。しかし，この現実性〈R〉，必然性〈I〉，可能性〈P〉の間の循環は，決して一度で完了するものではない。この循環は繰り返されて，〈R〉，〈I〉，〈P〉は相互に次第に変化して行く。たとえば，必然性〈I〉が明らかになることによって，その後の現実性〈R〉の価値付けも，認識も，そして，働きかけとしての行動も，変化する。それに伴い，視野に入る可能性のある現実性〈R〉も変化する。すると，そこから「想像自由変更」されうる，想像しうる可能性〈P〉も変化する。そして，そのことにより，「本質直観」される必然性〈I〉が変化し，それにより，また，……。それが，個人における行動と認識の発達の道筋であり，また，社会における常識と技術や研究の発展の道筋であろう。こうして，〈R〉，〈I〉，〈P〉は，いわば，永久循環をすることになり，「我（Person）と世界」は，ますます豊饒化し，混沌と秩序が相互に豊かになる。というのが，私の「本質直観」に基づく，〈RIP〉の循環に関する「本質」である。さて，二つの構造に共通する結節点としての現実性〈R〉が，〈RIP〉と〈*SIR* STOP etc〉とを連結することにより，連結された全体構造として，〈RIP *SIR* STOP etc〉原理が，経験世界の本質的構造として，出現することになる。

〈RIP *SIR* STOP etc〉原理が与えるもの

〈RIP *SIR* STOP etc〉原理が与えるものは何か。言い換えれば，**〈*SIR* STOP etc〉原理**に**〈RIP〉**が加えられたことにより，何が変化するか，という問いである。**〈*SIR* STOP etc〉原理**が与えるもの，その「効用」については既に述べた。では，さらに，**〈RIP〉**が加わることによって，何が変化するのか。端的に言えば，**〈*SIR* STOP etc〉原理**のみの場合は，木田の言うところの参照項Xとしての「世界」の豊饒化は描かれているが，その豊饒化の発展の方向性は描かれていなかった。それに**〈RIP〉**が加わることにより，発展が前進する方向性が得られたことになる，というのが私の答えである。しかし，この発展は，決して立ち止まることはない。人類が続く限り，あるいは，ある特定集団が存続する限り，また，個人が生きる限り，それぞれの**〈RIP *SIR* STOP etc〉**は，循環を続けながら，前進あるいは発展を続ける。そのように，「本質直観」する。ただし，**〈RIP *SIR* STOP etc〉原理**が，無自覚的にせよ自覚的にせよ，人間の経験世界において，働き続ける限り，と付言しなくてはならない。貧しく暗く狭い世界に生き続けることも，現実的可能性としてあるからである。さて，この循環運動と発展運動は，二次元的な空間においてイメージするならば，（*SIR* STOP etc），相互に矛盾し両立しないように思われるかも知れない。しかし，高次元においては，両立するイメージが描けるのである。以下にそれを見よう。

循環運動から螺旋運動へ，二重螺旋運動から多重螺旋運動へ

人間の「世界と私」の把握は〈*R* STOP etc〉，〈*SIR* STOP etc〉，〈RIP *SIR* STOP etc〉に沿って，循環して深まって行く。例えば，R世界においては，例えば，S→T→O→P→S→T→……，という具合に循環運動する。しかし，この循環運動は，同時に，〈*R* STOP〉→〈*I* STOP〉→〈*S* STOP〉→〈*R* STOP〉→〈*I* STOP〉→……，という具合にも，進行する。そしてさらに，〈RIP〉においても，同様に，上述の循環運動が進行する。これら同時進行する多重的多層的な循環運動，しかも，それぞれが循環するたびに，一歩一歩と前進する。そのような在り様を，もし空間的にイメージしようとするならば，平面的な循環運動に，直線的な前進の時間的要素を加えて，回帰的循環運動から前進的螺旋運動へと，イメージを変化させることが，相応しい，と私は考える。すると，螺旋運動は，直ちに，一重螺旋から，二重螺旋へと変身することが，イメージされる。螺旋運動全体が螺旋運動を始めるのである。そして，さらに，二重螺旋は，三重，四重，さらに，……と，次第に多重的多層的な多重螺旋運動へと前進し，発展して行く。それが，人間の「世界と私」の把握，「世界把握と自己把握」の進化発展，多重化多層化を表現するイメージに相応しい。「世界拘束」と「世界離脱」の両傾向，「世界不安」と「世界信頼」の両傾向（シュルツ，W. 1986）なども，この無限に豊饒化し，前進し，発展して行く多重螺旋運動のイメージにおいて，〈RIP *SIR* STOP etc〉原理において，本質把握が成されうる。そのように，私は考えるようになった。

ちなみに，Seamon（1993，220）は，異なる世界が融合するにいたる過程を，「循環関係」（The Relationship Cycle）として描き，その優れた現象学的解明を試みている。この循環は，不満，問い，探索，（他者と出会う），受容の試み，受容，（共に育つ），理解，心遣い（caring）と循環する異世界との融合の過程である，という。暗黙のうちに，一重螺旋運動が示唆されている。

多重螺旋運動のイメージの詳細な展開は，この小論では，割愛せざるを得ない。

おわりに

もし，STOPなどの記号による，またAcronymによる，象徴化が許されない条件下にあったとしたら，以上の複雑な構造を簡潔にしかも一瞥のうちに把握したり表現したりすることは，ほとんど不可能に近かったであろう。その意味では，この原理の表現そのものが，この原理を活用している，とも言えるのである。もっとも，本稿が，何らかの積極的な意味を持つことができるか否かについては，読者の判断に任せよう。私自身による自己批判は，機会を改めてのこととしたい。幻想的かつ空想的，想像的かつ創造的な独白を書き終えてみて，私自身には，素的な展開となった，との思いがふつふつと湧いてきている。原理について語り終えた今，この段階での最終

形式を，もう一度，「呪文」の如くに唱えて本稿を終える。〈**RIP friendly *SIR* STOP etc MOM**〉。

謝辞

この論稿は，「淑徳大学大学院研究科紀要」と言う自由で寛容かつ柔軟で肥沃な場を与えられなければ，世に出ることも出来なかったはずのものである。まさに，「安らかに眠れ」であると同時に「暴きたてよ」の呪文〈RIP〉によって，誕生することが可能となった論稿である。ここに，このような場が与えられたことに，〈*S*〉をもって，謝意を表したい。また，収録した図（Figure）の主要なものは，淑徳大学大学院総合福祉学研究科博士課程の岡愛子氏により描かれたものである。そのお骨折りに対して感謝したい。

注記

本稿で活用したAcronymの効用を私が学んだのは，1960年当時，東京大学大学院にコロンビア大学から来日しておられたBeredy教授の比較教育学の講義においてであった。戦時中，実戦に参加し数奇の運命を辿った教授が，講義ノートなしで，数々のAcronymを手がかりに，内容豊かに講義されるその途轍もない記憶力に驚嘆したことを，懐かしく想起した。

参照文献（著者名　邦文献は50音順，洋文献はABC順）

邦文献

イエイツ，フランセス・A.（1993）『記憶術』玉泉八州男監訳，水声社

インガルデン，R.（1983）『文学的芸術作品』瀧内槇雄・細井雄介訳，勁草書房

インガルデン，R.（1983）『人間論：時間・責任・価値』武井勇四郎・赤松常弘訳，法政大学出版局

ウォーコップ，O.S.（1984）『ものの考え方 —— 合理性への逸脱』深瀬基寛訳，講談社学術文庫

荻野恒一（1971）『ドストエフスキー　芸術と病理』金剛出版

川端柳太郎（1978）『小説と時間』朝日新聞社

木田　元（1993）『ハイデガー入門』岩波新書

キーン，E.（1989）『現象学的心理学』吉田章宏・宮崎清孝訳，東京大学出版会

クンデラ，M.（1990）『小説の精神』金井裕・浅野敏夫訳，法政大学出版局

小森健太郎（1992）「ニーチェの歴史観に基づく教師の生の解明：武田常夫の著作を手掛かりとして」，『学ぶと教えるの現象学研究　四』東京大学教育学部教育方法学研究室，159－206

西郷竹彦（1991）『虚構としての文学』国土社

西郷竹彦（2005）『虚構の方法・世界』，『名詩の世界　5』光村図書

塩野七生（2007）「日本と日本人への10の質問」『文芸春秋』平成19年7月号，114－127

ジオルジ，A.（2004a）「看護研究への現象学的方法の適用可能性」吉田章宏訳・構成

『看護研究』第37巻，第5号，49－57
ジオルジ，A.（2004b）「経験記述資料分析の実際：現象学的心理学の『理論と実践』」吉田章宏訳・構成『看護研究』第37号，第7号，63－75
シュルツ，W.（1986）『私と世界：主観性の哲学』藤田健治監訳，二玄社
ジャンケレヴィッチ，V.（1994）『還らぬ時と郷愁』仲澤紀雄訳，国文社
庄司和晃（1986）『コトワザ教育のすすめ：未来の教育学のための文化研究』明治図書
新宮一成（1995）『ラカンの精神分析』講談社現代新書
滝浦静雄（1988）『メタファーの現象学』世界書院
竹田青嗣（2004）『現象学は〈思考の原理〉である』ちくま新書
谷崎潤一郎（1958／1934）『谷崎潤一郎全集　第21巻「文章読本」』岩波書店
中澤栄輔（2007）「時間意識と時間図表」，『現象学年報23』，日本現象学会編，185－193
ニイチェ（1935）「生にとっての歴史の利弊」，『反時代的考察　上巻』井上政次訳，岩波文庫，121－233
波多野完治（1990）『ことばの心理と教育』波多野完治全集九，小学館
服部セイコー編（1988）『時間：東と西の対話』河出書房新社
ハヤカワ，S.I.（1951），『思考と行動における言語』，大久保忠利訳，岩波書店
ビンスワンガー，L.（1959）『精神分裂病』新海安彦・宮本忠雄・木村敏訳，みすず書房
フッサール，E.（1967）『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳，みすず書房
フッサール，E.（1974／1954）「幾何学の起源」，『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳，中央公論社，386－413
ブラント，ゲルト（1976）『世界・自我・時間：フッサール未公開草稿による研究』，新田義弘・小池稔訳，国文社
ボーヴォワール，S.（1972）『老い：人生の究極的意味』上下，朝吹三吉訳，人文書院
ボルノウ，O.F.（1978）『人間と空間』大塚恵一・池田健司・中村浩平 訳，せりか書房
ミンコフスキー，E.（1972・1973）『生きられる時間 1／2』中江育生ほか訳，みすず書房
メルロ―＝ポンティ M.（1967／74）『知覚の現象学 I ／ II』滝浦静雄・木田元訳，みすず書房
安永　浩（1987）『精神の幾何学』岩波書店
ユクスキュール／クリサート（2005）日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』岩波文庫
吉田章宏（1978）『授業の研究と心理学』国土社
吉田章宏（1991）『教育の方法』放送大学教育振興会
吉田章宏（1995）『教育の心理』放送大学教育振興会
吉田章宏（1999）『ゆりかごに学ぶ：教育の方法』一茎書房
吉田章宏（2005a）「『説明』を誘う発問と『理解』を誘う発問：ある達人教師の授業実践にお

ける発問芸術の現象学的解明」『淑徳大学大学院・社会学研究科・研究紀要』第12号，39－82

吉田章宏（2005b）「匿名化から虚構化へ：実践報告の存在理由に即して」『淑徳心理臨床研究』，第２巻，1－12

吉田章宏（2007）「心理学研究方法論をめぐる省察：特定諸方法への偏見を克服し，統合化へ向う道」，『淑徳大学・総合福祉学部・研究紀要』，第41号，65－87

ランガー，S.K.（1960）『シンボルの哲学』矢野萬里ほか訳，岩波書店

リクール，P.（1984）『生きた隠喩』久米博訳，岩波書店

リクール（1996）『他者のような自己自身』久米博訳，法政大学出版局

ルリヤ，A.（1983）『偉大な記憶力の物語：ある記憶術者の精神生活』天野清訳，文一総合出版

レイン，R.D.（1973）『結ぼれ』村上光彦訳　みすず書房

レヴィナス，E.（1986）『時間と他者』原田佳彦訳，法政大学出版局

ローゼンターリ，M.M.他編（1958）『カテゴリー論』上下，寺沢恒信・林礼二・野中昌夫訳，青木書店

渡邊二郎（1999）『歴史の哲学：現代の思想的状況』講談社学術文庫

『宝積部経典』（1974）大乗仏典　9，長尾雅人，櫻部建訳，中央公論社

洋文献

Arnheim, Rudolf（1969）*Visual Thinking*, University of California Press

Buchanan, Scott（1962/1929）*Poetry and Mathematics*, J.B. Lippincott Co.

Black, Max（1962）*Models and Metaphors ; Studies in Language and Philosophy.* Cornell UP（25－47）

Casey, Edward（1976）*Imagining : A Phenomenological Study,* Indiana UP

Flavell, John H.（1963）*The Developmental Psychology of Jean Piaget,* Norton

Heidegger, Martin（1982/1975）*The Basic Problems of Phenomenology,* trans. from German by Albert Hofstadter, Indiana University Press

Hesse, Mary, B.（1963）, *Models and Analogies in Science,* Sheed and Ward

Joyce, Bruce/Weil Marsha（1972）, Synectics, Chap. 14, in *Models of Teaching,* Prentice Hall, 233－252

Koselleck（1989）*Vergangene Zukunft : Zur Semantik geschichtlicher Zeiten,* Suhrkamp

Kundra, Milan（1986）: *The Art of the Novel,* trans from French by Linda Asher, Harper and Row

McKeller, Peter（1957）*Imagination and Thinking,* Basic Books

Piaget, Jean & Baebel Inhelder（1963）*The Child's Conception of Space,* trans from French by. F.J. Langdon & J.L. Lunzer, RKP

Schutz, Alfred and T. Luckmann（1973）*The Structures of the Life-World,* I. & II. Trans. R. Zaner ond

others. Northwestern UP

Seamon, David (1993) Different Worlds Coming Together : A Phenomenology of Relationship as Portrayed in Doris Lessing's Diaries of Jane Somers. In David Seamon ed. *Dwelling, Seeing, and Designing,* SUNY. 219 – 246

Shibles, Warren A. (1971) *Metaphor: An Annotated Bibliography and History,* The Language Press

Sorell, Walter (undated), *The duality of vision : Genius and versatility in the arts,* Bobbs – Merrill Co..

Spiegelberg, H. (1971) *The Phenomenological Movement : A Historical Introduction,* Vol. II Martinus Nijhoff

Theunissen, M. (1984/1977) *The Other : Studies in the Social Ontology of Husserl, Heidegger, Sartre, and Buber,* trans.from German by Christopher Macann, MIT Press

Yoshida, Akihiro (2000) A Phenomenological Explication of the Lived Worlds of Application System Engineers : a tiny attempt. *The Journal of Kawamura Gakuen Woman's University,* Vol. 11, No. 1, 69 – 86

A Principle of Unification through Diversification: The 〈RIP friendly *SIR* STOP etc MOM〉 Principle

The diversification of the human lived-world into the multiple realities, and their multi-layered re-integration by means of their mutual exchanging, transformation and complementation

Akihiro YOSHIDA, Ph. D.

This article proposes a principle, which claims to be explicating and showing, at least partly, the essential structure and meanings of the human lived-world. Its name is the 〈RIP friendly *SIR* STOP etc MOM〉 Principle. The six terms included in the name of the principle are all acronyms, which are to represent the very contents of the Principle. Therefore, the explication of these acronyms naturally leads to that of the Principle elaborated in the article. The first term 〈RIP〉 means, on the one hand, "requiescat in pace", which means "May s/he (or they) rest in peace", but it also means "Open up again". On the other hand, in the Principle, it is also supposed to mean "**R**eality, **I**nevitable necessity, and **P**ossibility". The second term 〈friendly〉 means "amicable", but it is also supposed to mean 〈FRIENDLY〉, that is, "**F**amiliarizing the unfamiliar ; **R**epresenting the un-represented, **I**nterpreting the un-interpreted ; **I**nterpreting /informing the un-interpreted /uninformed ; **E**mphasizing the un-emphasized /de-emphasizing the emphasized [illegible] Enabling to see the un-seeable ; **E**nabling to visualize the invisible] ; **N**ormalizing the un-normalized [illegible] **D**iscovering the un-discovered ; **L**iberating the not-yet-liberated ; **Y**ielding the wisdom. The third term 〈*SIR*〉 is the noun usually used as a titular prefix to name of a nobleman, but it also is supposed to represent "**S**ymbolic, **I**maginative and **R**eal". The fourth term 〈STOP〉 is supposed to be the name of a noble person, whose beloved maxim is "Stop not thinking, but stop to think!". However, it is also supposed to represent "**S**pace, **T**ime, **O**ther(s) and **P**erson". The fifth term 〈etc〉 means "et cetera", i.e. "and so on", but it is also supposed to mean "**E**xchangeable, **T**ransformable and **C**omplementary". Finally, 〈MOM〉 represents "Mother", but also a principle of "Mapping", in modern algebra, e.g. "homo-morphism", between sub-worlds in the multiple realities of the human lived-worlds, in the sense of Alfred Schutz. Consequently, the 〈RIP friendly *SIR* STOP etc MOM〉, on the one hand, constitutes a parable with the fictitious nobleman SIR STOP, but it also represents a Principle that 〈STOP〉 in 〈SIR〉 worlds are mutually 〈FRIENDLY〉 and can be regarded as 〈ETC〉 by 〈MOM〉. Besides, the same 〈R〉 world can be, by the "free imaginative variation" transformed into the 〈P〉 world, and then, by the intuition of essences, can lead to the 〈I〉 world. The multiple relationships between/among the constituents of the 〈RIP friendly *SIR* STOP etc〉 are explicated and explained each with a few examples and relevant references. The possible merits of the principle have been examined. With an essential Mapping structure 〈MOM〉 (representing O=MOM) incorporated, the final formulation resulted is the single formula: The 〈**RIP friendly *SIR* STOP etc MOM**〉 Principle.